HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	“余計者”小考 : 1856年版『トゥルゲーネフ中・短篇集』をめぐって
Author(s)	出, かず子
Citation	スラヴ研究, 18, 167-221
Issue Date	1973
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5036
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112976.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

“余計者”小考

——1856年版『トゥルゲーネフ中・短篇集』をめぐって——

出　かず子

はしがき

いまでは忘れられているが,[1] 1856年の『同時代人』No. 12に，3部からなる『И. С. トゥルゲーネフ中・短篇集』について，次のような新刊広告が出ている。本稿は初期トゥルゲーネフの研究に資するために，この『中・短篇集』刊行の機会に現われた評論資料のいくつかを整理し紹介することを目的としている。その広告によれば，

「この版にはトゥルゲーネフ氏の『猟人日記』を除く中・短篇のすべてが収められている。これらの中・短篇はすべて雑誌に掲載されたので，読者には多少なりともなじみのあるものである。われわれはトゥルゲーネフ氏の戯曲作品が出版されるだろうということは耳にしていた。かくも大きな知力，繊細な観察力および詩情に溢れた，これらの中・短篇について，来年の第1号にその批評が掲載されることを期待し，いまは，これらに対して出版者に感謝する。彼は自分の仕事を見事にやり遂げた。この版は趣味の豊かさに特色がある。すなわち紙と活字が見事である。この版はトゥルゲーネフ氏の初期の中篇の一つ——1844年の『祖国雑記』に現われた『アンドレイ・コーロソフ』に始まり，2ヶ月前に『同時代人』に掲載され，いま «*Revue des Deux Mondes*» に翻訳されている『ファウスト』で終っている。」[2]

実は『ルーヂン』の執筆以前すでに1854年ごろから，トゥルゲーネフには『中・短篇集』を編む目論見があったが，いまや1856年の秋に П. В. アンネンコフ監修，Д. Я. コルバシン実務担当のもとに，その目論見は具体化した。[3] その年の8月以後パリに滞在していたトゥルゲーネフは，刊行された1部を贈呈する意志を С. Т. アクサーコフに伝える

---

1) 最近用いられているトゥルゲーネフの著作集は次の諸版である。
Сочинения, т. 1-12. Под ред. К. И. Халабаева и Б. М. Эйхенбаума, М.-Л., 1928-34; Собрание сочинений, т. 1-12. М., Гослитиздат, 1953-58; Полное собрание сочинений и писем, т. 1-28. М.-Л., АН СССР, 1960-68. 本稿での引用はすべて Полное собрание сочинений и писем, т. 1-28. 1960-68 による。以下引用の際は巻数とページ数のみ記す。

2) この『中・短篇集』の原名は «Повести и разсказы И. С. Тургенева» (Три части) である。この新刊広告は無署名であるが，Н. Г. チェルヌィシェフスキーの執筆になるものと推定されている。

3) Д. Я. コルバシンは，1856年9月28日（10月10日）付でトゥルゲーネフにあてて書いている。「あなたの『中篇』は3部に印刷され，すでに2部準備ができています。第1部は『アンドレイ・コーロソフ』に始まり，『三奇遇』で終っています。第2部は『街道の会話』に始まり，『凪』で終わり，第3部は『往復書簡』に始まっています」。Тургенев и круг «Современника», М.-Л., “Academia”, 1930, стр. 268.

とともに，収められた自作に対する自己評価を次のように表わしている。「アンネンコフ版『中・短篇集』の1部をあなたに送り届けるよう，ペテルブルクに手紙を書きました。それらのなかには弱いもの，未完成なもの――いく分は無精からの未完成，いく分は，何をかくそう！無力からの未完成――があまりにも沢山あることを私は知っています。だが悪いものは見逃すか，あるいは心のなかで補って下さい。その他のものも寛大に見て下さい。私は空位時代の――ゴーゴリと未来の指導者との間の時代の――作家の一人です。……」[4]

このアンネンコフ版『中・短篇集』には，冒頭にトゥルゲーネフ自身の次のような簡単な序文が付され，下記の作品が収められている。

「現代において序文を書くことはむずかしい仕事である。それらのなかで芸術に対する自分の見解を叙述することは時宜に適していない。読者に寛容を乞うこと，これは無益である。読者は著者の謙遜を信じない。それゆえ，私の中・短篇の全集をもちたいと願った書籍商諸氏の要求ではないけれども，若干のものが削除されるであろうことをお断わりするにとどめる。また収められるもののうちの二篇『凪』と『パースィンコフ』においては必要な補足がなされ，その他のものは可能な限り訂正されていることを記しておこう。

И. Т.

サンクト・ペテルブルク

1856年3月」[5]

〔目　次〕

第1巻		
「アンドレイ・コーロソフ」	（中篇）	『祖国雑記』1844, No. 11.
「決闘屋」	（中篇）	『祖国雑記』1847, No. 1.
「三つの肖像画」	（短篇）	『ペテルブルク文集』1846.
「ユダヤ人」	（短篇）	『同時代人』1847, No. 11.
「ペトゥシコーフ」	（中篇）	『同時代人』1848, No. 9.
「余計者の日記」	（中篇）	『祖国雑記』1850, No. 4.
「三奇遇」	（短篇）	『同時代人』1852.
第2巻		
「街道の会話」	（戯曲）	文芸作品集『彗星』1851.
「ムムー」	（中篇）	『同時代人』1854, No. 3.
「はたごや」	（短篇）	『同時代人』1855, No. 11.
「うぐいすについて」	（論文）	『P и B』[6] 1854 執筆
「二人の友」	（中篇）	『同時代人』1854, No. 1.
「凪」	（中篇）	『同時代人』1854, No. 9.
第3巻		
「往復書簡」	（中篇）	『祖国雑記』1856, No. 1.
「ヤコフ・パースィンコフ」	（短篇）	『祖国雑記』1855, No. 4.

4) Тургенев, Письма, III, 31–32.
5) Тургенев, Соч. VI, 375.
6) Рассказы и Воспоминания охотника о разных охотах С. Аксакова. С прибавлением статьи «О соловьях» И. С. Тургенева. М., 1855, стр. 179–191.

“余計者”小考

「ルーヂン」	（ロマン）	『同時代人』1856, No. 1, 2.
「ファウスト」	（中篇）	『同時代人』1856, No. 10.

トゥルゲーネフのこれらの初期作品については，もちろんまだわずかの邦訳しかない。それればかりか，伝記研究，文学史研究におけるこれまでの諸条件に左右されて，なお未解決の事柄が多い。すなわち，伝記に関しては，ポーリナ・ヴィアルドー夫人との往復書簡に重点が置かれ，文学史に関しては，『ルーヂン』以後の四大ロマンに重点が置かれ，あるいはまた「革命的民主主義批評」とその衣鉢を継ぐ角度からは，前掲の作品よりもむしろ『猟人日記』その他が重視されてきた。本稿では，先ず関係往復書簡の整理を通じて当時の文学批評界における C. C. ドゥドゥィシキン（Дудышкин, Степан Семенович, 1820–1866）の批評の役割を見定め，このドゥドゥィシキンの評論を中心に据えて，その内容を整理・紹介し，あわせてそれに対する H. Г. チェルヌィシェフスキーの反論について言及することを試みた。[7] ここでとりあげるドゥドゥィシキンの評論をめぐる当時の状況に関していえば，1856年この『中・短篇集』が出たその1年前には，美学に関するチェルヌィシェフスキーの学位論文を快く思っていなかったトゥルゲーネフは，その論文に対するドゥドゥィシキンの反論を歓迎しており，他方またその1年後の1858年にはトゥルゲーネフの珠玉篇「アーシャ」のもつ高い文学的価値をチェルヌィシェフスキーが認めていたという，やや複雑な事情がある。[8] ドゥドゥィシキンの評論は，その中間の1857年のものである。その評論は“余計者”を主題として展開されているので，本稿の標題も“余計者”小考とした。

I

監修者アンネンコフが，ともかくも，トゥルゲーネフをロシア文学における「現代感覚の体現」とみなしていたことにはまちがいがない。[9] しかしパリにいたトゥルゲーネフは，『中・短篇集』に対するペテルブルクやモスクワの評判を気にしていた。刊行直後，彼は『同時代人』の協力者 Е. Я. コルバシンにあてて，「現われるすべての批評をそのままのかたちで，つまり切り抜きで，また勘定はこちらでもちますから写して送って下さい。切にお願いします」[10] と頼んでいる。同様の依頼状が M. H. ロンギノフ，B. П. ボトキン，

7) ドゥドゥィシキン，ドゥルジーニンの評論資料に関しては，アメリカ議会図書館の好意によって入手することができた。ただし『サンクト・ペテルブルク通報』（とくに П. バシストフの評論），『祖国の子』（A. И. ルイジョフの評論）および『モスクワ人』『モスクワ論集』の関係資料はなお未見である。バシストフの評論の趣旨がドゥドゥィシキンに近く，かつドゥルジーニンと対立していることが間接に知られている。

8) 拙論「チェルヌィシェフスキーの美学理論（Ⅰ）-（Ⅱ）」,『スラヴ研究』No. 13, 14., 1969, 1970；「『ランデ・ヴーにおけるロシア人』考」,『スラヴ研究』, No. 16, 1972. 参照。

9) К. バニェツキーは，アンネンコフがドゥドゥィシキン評論の見解を共有していたと述べているが，これは「アーシャ」をめぐってのチェルヌイシェフシキーに対するアンネンコフの反論「弱い人間の文学的タイプ」等を念頭においた一般論としてのみ妥当であろう。(См. К. И. Бонецкий, Вступ. статья к сб. Тургенев в оценке русской критики, М., Гослитиздат, 1953, стр. 30.) 本文中の引用は，Труды ГБЛ, т. III, стр. 64 による。

10) Тургенев, Письма, III, 57. (1856年12月14（26）日付).

A. И. ゲルツェンにも出された。[11] それに対して，初めロシア文壇史にも詳しいロンギノフなどから幸先のよい通知が伝えられていたが，年が明けて2月上旬には，Е. Я. コルバシンから病気見舞いとあわせて悲観的なしらせが伝えられるに至った。「卒直に申しますが，読者大衆はあなたの『中篇』にかなり冷淡です。本屋では『猟人日記』はいつ出るのかとたずねる人が絶えません。ごめんなさい」。[12] その間にパリのトゥルゲーネフをいたく動揺させ，やがて彼をして作家活動から退こうとさえ言わせた一つの情報があった。それこそ，本稿でとりあげる『祖国雑記』の1月号に掲載されたドゥドゥィシキンの評論に他ならない。1月26日（2月7日）トゥルゲーネフは次のように書いている。「親愛なるコルバシン，僕はあなたの手紙を長い間待ちこがれていました。手紙をありがとう。あなたが知らせてくれた事実はとても興味があります――僕についてのドゥドゥィシキンの論文は，多分多くの正当なこと，適切なことを示しています――しかし僕の才能に関する自分の高くない評価にもかかわらず，僕はやはり，自分が全く書かない方がいいだろうという意見には賛成したくないのです。少なくとも，いまや自分について裏の裏まで真相が分かりました」。[13] そして1ケ月も経たないうちに作家のいわゆる危機をあらわす特筆すべき1通の手紙がボトキンあてに送られる。

「親愛なるボトキン，君に10回も書きかけた，といっても過言ではあるまい――だが一度も半ページ以上書くことはできなかった。多分今度はうまくゆくだろう。――僕は君に自分について語るのを止めないだろう。この人間は破綻したのだ――これで十分だ。何も説明することはない。僕は自分を，掃き出すのを忘れられたごみだと絶えず思っている――これこそ君に伝えたい僕の Stimmung なのだ。おそらくこれは僕がパリを見捨てるときに治まるだろう。――……一昨日僕は，僕の新しい仕事，プランのすべてを（ゴーゴリを真似ることになるのを恐れたがために）焼き捨てはしなかったが，ずたずたに破いて便所に投げ捨ててしまった。これはみんなくだらぬことだ。僕は特別な相貌や完璧さをそなえた才能など持ちあわせていない。あったのは詩的な弦だが――それも鳴りはしたが，すでに鳴りやんでしまった。――くり返したくはない。退くべきか！これは失望からの発作ではない。僕を信じてくれ――これは徐々に熟した信念の表現あるいは結果なんだ。――僕の中篇の不成功（コルバシンその他の人々が最も正しい資料のなかから僕に知らせてくれたのだが）は僕にとっては何も目新らしいことではなかった。僕は退く。――傾向性をもった作家としてシチェドリーン氏が僕と入れかわるだろう（いまや読者大衆にはピリッとした，だが荒っぽいものが必要なんだ）――そしてトルストイのような詩的で完全

11) Тургенев, Письма, III, 37, 47, 50.

12) コルバシンからトゥルゲーネフあて，1857年2月7(19)日付手紙。Тургенев и круг «Современника», М.-Л., «Academia», 1930, стр. 327. これに対して，外国からペテルブルクに戻ったネクラーソフは，1857年9月10 (22) 日付トゥルゲーネフあての手紙で次のように知らせている。「君の中篇ははかばかしくないという噂がパリのわれわれのところに届いていた。これはくだらぬことだ。3000部のうち，全部で300部残っただけだ」(Некрасов, т. X, стр. 362.)。また『中・短篇』のほとんどすべての印刷部数が売切れたことについて，П. В. アンネンコフは1857年11月16 (28) 日付トゥルゲーネフにあてて書いている (См. Труды ГБЛ. т. III, стр. 73.)。

13) トゥルゲーネフからコルバシンあて1857年1月26日（2月7日）付手紙，Тургенев, Письма, III, 86.

な天性の人は，僕がほのめかしただけのものを鮮やかに，そして完全に仕上げて呈示するだろう。……僕はロシア語がかなり堪能だから——『ドン・キホーテ』の翻訳をするつもりだ。——もしも健康であるならば。おそらく君は，これがみんな誇張だと思うだろう——で，君は僕を信じないだろう。……」。[14]

このようなトゥルゲーネフの動揺と危機の原因になったコルバシンの「正しい資料」に基づく情報とはいかなるものであったのだろうか。それは1月15日付ペテルブルクのコルバシンからパリのトゥルゲーネフにあてた手紙のなかで伝えられたドゥドゥィシキン評論前半の要約である。この要約はやや長いが，コルバシン自身も言っているように「きわめて読みにくい」評論全体を「冷静に伝えて」おり，本稿の以下の整理にも役立つと考えられるので，次の通り本節の付録として訳載しておく。

〔付　録〕

ところで，遅れて出た『祖国雑記』の1月号に，あなたの『中・短篇』についての大論文が掲載されています。

その主な要点は以下のようなものです。つまり，各々の文学者を，その文学者が目ざしている理想によって規定しうるということです。トゥル〔ゲーネフ〕氏には理想がある——だがそれらはどのようなものか，それらは逃れよう逃れようとする方向にむかい，ロシアの土地に固定されていない。それらはベリトフ風に思い切りののしり，船に乗って外国に行くだろう。どのようにして，そしてこれはなぜか，と彼は言っています。批評家は自分に問うているのです！　そして勿論数ページで答えています。ほぼこんな風にです。すなわち，「パラーシャとアンドレイの作者」？！ の信念はろくでもない信念である。つまり，彼の理想は，教養はあるが自分のなすべき活動を見いだせない若い人間……かの“余計”者である。状況は，ゴーゴリによって描かれた，わがロシアの人里離れた町や村の，あの生活である。この処方箋によって書かれたトゥル氏の最初のポエマをベリンスキーは次のようなことばで迎えた。すなわち，「トゥルゲーネフ氏の詩に表わされているのは，異常な詩的才能，正しい観察力，ロシア生活の奥底からくみ上げられた深い思想，かくも豊かな感情を秘めている優美で繊細なアイロニーである——すべてこのことは，作者が創作の天分を有しているばかりか，わが時代の悲哀と問題とのすべてをおのが胸に秘めているわが時代の息子であることを示している」等々等々，——すべて偉大なるヴィッサリオンの正真正銘のことばによっています。これは何のことはない——とドゥドゥィシキンは言っています——批評家と詩人とは互いに買収されあっていて，実際にはなかったものを見ていたのである。当時——と彼は続けています——人々は生活，恋愛，活動において月並みさと自己満足を何よりも恐れており，それらからあてもなく逃げ出していた。外国へ……一言でいえば——これは“余計”者である……彼らにとっては，これらの理想主義者にとっては，船に乗って最初の順風で走り去るのは結構なことだった。しかし，彼らがあえて高慢にも見下した人々にとっては，どうであっただろうか——

そこではすべてがこのような可愛いやり方でページが次から次へと続き，ついに「会話」，「アンドレイ」，「パラーシャ」からの長い抜萃が続いています。（彼はあなたがこれらの作品を『中・短篇』の全集から除いていることに少しも遠慮していません）。しかし何よりも面白いのは，最後の結論です。「われわれはトゥルゲーネフ氏の散文のなかにいまだ生活の完全な理解を見いだせないでいる」（これは批評家の正真正銘の文章です）。沈痛そうに顔をしかめ——それは卑しく，極度に偽善的で，5才の童児にも明らかなほどです！——彼は続けています。トゥル〔ゲーネフ〕氏の文筆活動の続く12年は過ぎ去った……何にか？　問題の絶えまない解明に。しかし，それは——驚くなかれ！——今世紀の初

14）トゥルゲーネフからВ.П.ボトキンあて1857年2月17日（3月1日）付の手紙。Тургенев, Письма, III, 91-92.

めにカラムジーンによってすでに解決ずみのものであった。以下に正にその解決を述べましょう。

「私の父の家には」――とカラムジーンは A.И.トゥル〔ゲーネフ〕に書いた――「あなたにとって有益な活動はそこではなく，他のところに見いだされる。他人がわれわれに有益な活動を要求しなければしないだけ，それだけ，われわれは道徳的存在としてその活動を自分により多く要求しなければならない。われわれ，魂をもったロシア人にとっては，ロシアだけが独自のものであり，ロシアだけが真に存在する。他のすべてはただロシアに対する関係にすぎず，考え，幻にすぎない。われわれはドイツ，フランス，イタリアにおいて考え，夢みることはできる。しかしロシアでは行為をなすことができる。そうでなければ，市民もおらず，人間もおらず，いるのはただ胴体をもった二本脚の動物である」。なるほど！批評家は指摘しています――トゥル〔ゲーネフ〕氏が1856年にようやく中篇『ルーヂン』において，多年の仕事と多くの中篇ののちに，しかも今世紀の初めに知られていた簡単な帰結に到達したことは遺憾である，と。そしてトゥル〔ゲーネフ〕氏はようやく1856年になってこう述べたのだった――コスモポリティズムというのは馬鹿げた思想でコスモポリートなどという人間はゼロです，ゼロ以下ですよ，と。そしてようやく，「ファウスト」のなかでこう言っている。すなわち，生活は冗談でもなければ慰みでもなくて，苦しい労働なのだ，われわれはわれわれの義務を履行する使命を担っている，と。これは古くからの問題であり，もうずっと以前から知られており，カラムジーンはこれを解決して，『ロシア国史』にたずさわるようになったのであった。プーシキンは若さの年貢を納めて19世紀から17世紀に自分を移して，『ボリス・ゴドゥノーフ』に着手した。ゴーゴリもまた同時代の問題の解決に迫った（『往復書簡』において）が，すでにあまりにもスコラ的であった。このように評者は言っています――それは中篇の課題でも，美学の課題でもなく（論文全体がパトロンのアンドリアスの気に入るような傾向にそっていた），科学的論文，歴史や哲学の仕事である。おそらくこれは本当です。けれども，兵士のかみそりのように鈍いだけの『祖国雑記』の論文の仕事ではありません。

「しかし，たまたまもう一つの問題が現われる――と批評家は結んでいます――はたしてその個性（"余計"者の個性）は，それの仕上げに全力をつくすに値するほど重要であり，わが社会においてそれほどまでに重きをなしているであろうか。はたしてその個性は，その個性に結び付いているイデーが，ロシアの生活[15]の領域で占めているのと同様の位置を，わが生活において占めるものであろうか。その個性は，社会に生きている人間の諸タイプの多様性という点で重要であるというよりも，それの導いてゆく問題に関して，よりいっそう重要であるように思われる。もしかりに前者の点で重要であるとするならば，それらの人物の色調はよりいっそう多様であろう。というのは，それらの人物のどれをとってみても，それは自己と同類の他のものを思い起こさせ，そればかりか，そのいずれもがいわば気化するからである。カンヴァスに描かれた人物画についても，もし事実その人物画のなかに本性が乏しいならば，それらの肉付けが貧しいことが示されている。われわれはトゥル〔ゲーネフ〕氏の中篇の多くの主要人物についても同じことを言いうるであろう。それらのなかには肉付けが貧しい，と。これは悪い徴候である。これらの人物は個有の本質によって，生活から逸脱して生きており，生活に接触せず，生活を知らないために，事実あまりにも単調かつ無特色である」。……[16]

II

1857年『祖国雑記』1月号に掲載されたドゥドゥィシキンの評論とは，正確にいえば，〈Повести и Разсказы И. С. Тургенева. *С 1844 г. по 1856 г. Санктпетербург. 1856. Три части.*〉 *Статья первая.* であり，したがって，т. 110 №. 1. отд. 2, стр. 1-28 に掲載された部分は全体の前半に当る。[17] ちなみに，これに対する後述のチェルヌィシェフスキーの反論はこの前半部分に対してなされたものである。

15) ドゥドゥィシキンの原文では「ロシアの科学」となっている。
16) Тургенев и круг «Современника», стр. 310-314.
17) 以下，ドゥドゥィシキンからの引用は，頭文字 Д. をそえてページ数のみを記す。

さて，批評家ドゥドゥィシキンに関しては，彼が当時の多くの批評家とともに，ベリンスキーのもとから輩出しながら後年（1861年）チェルヌィシェフスキーと激しく対立したこと以外あまり知られていない。まとめられている伝記にもなお曖昧な点があるばかりか，当時の評論界において彼の占めた位置についても「革命的民主主義批評」に対するドゥルジーニンの「純粋芸術理論」の味方とだけみなされる傾向が強い。[18] ともあれ，ドゥドゥィシキンは，1846年ベリンスキーが『同時代人』に移ったのち，『祖国雑記』の批評欄担当のマーイコフによって協力者に引き入れられ，その翌年のマーイコフの死以後彼にかわって担当者となり，特に1851年からは同誌の専属執筆者になっていた。他方『同時代人』の批評欄は，比較的よく知られているように，1848年ベリンスキーの死後ドゥルジーニンの担当するところとなり，55-56年編集部内の確執を経て，ドゥルジーニンが『読書文庫』に移ったあと，チェルヌィシェフスキーが勢力的に担当することになった。ちなみに，ドゥドゥィシキン評論に対する後述のチェルヌィシェフスキーの批判論文は『同時代人』1857年第2号に掲載されたものである。[19]

ところが，このあまり知られていないドゥドゥィシキンに関しては，洋の東西を問わず彼を「純粋芸術」の支持者のうちに数えるのが常である。例えば，「純粋芸術」の「批評家のうち，冷静な伊達者アレクサンドル・ドゥルジーニン（1824-64），すぐれた回想記作者パーヴェル・アンネンコフ（1812-87），ステパン・ドゥドゥィシキン（1820-66）などは，チェルヌィシェフスキー，ドブロリューボフ，ピーサレフと張り合う気性も能力も持たなかった」。[20] また，「貴族批評家ドゥドゥィシキン」[21] を初め「革命前夜の貴族陣営すべてにとっては，トゥルゲーネフを革命的民主主義運動に対置する志向が特徴的であり，革命的な考えとの斗争において彼の作品を用いる傾向があった」。[22] このような見方は，特にソ連の文学史研究家のあいだに一般的であって，やや単純化して言うならば，それは次のような図式によっているように思われる。すなわち，「美学的諸問題をめぐる革命的民主主義者と貴族自由主義者との論争は，19世紀後半のロシアの対立する二大勢力の思想的非妥協性を反映するものであり，その条件下でトゥルゲーネフは鋭い論争の対象になった」。したがって，「トゥルゲーネフの世界観は矛盾したものであり，彼の作品におい

---

18) 伝記に関しては，モスクワ大法学部出身とされたり，あるいはペテルブルク大法学部出身とされたりしており，また文学批評に関して，彼が純粋芸術理論の支持者のように見えるのは，ベリンスキー的「現実主義」を――彼特有の一種の「現実主義」の立場から――否定しているからに過ぎない。ともあれ，ソビエトの文学史研究においても彼の「文学批評的遺産の歴史的価値」に関して「いままでまじめに研究されなかったことは不当である」と反省されている。См. Русские писатели, Биобиблиографический словарь, М., Изд-во “Просвещение,” 1971, стр. 314-316.

19) Заметки о журналах, «Отечественные записки» (Дудышкин) о Тургеневе. 〈«Современник» 1857, No. 2. Январь〉.

20) スローニム『ロシア文学史』神西清・池田健太郎訳，新潮社，昭32，p. 221.

21) Е. Ефимова, Творчество И. С. Тургенева в оценке В. Г. Белинского, Н. Г. Чернышевского, Н. А. Добролюбова, «Орловский Альманах», Кн. 3. Орел, Изд-во «Орловская правда», 1950, стр. 156.

22) Е. Ефимова, И. С. Тургенев-Семинарий, Л., 1958, стр. 26. その他バニェツキーにも同様の見解がうかがわれる。(См. К. И. Бонецкий, Вступ. статья к сб. Тургенев в оценке русской критики, М., Гослитиздат, 1953, стр. 29.) なおドゥドゥィシキンは貴族出身ではなく，貧しい商人の家庭の生まれであると伝えられる。

ては民主主義的思想と自由主義的幻想とが結びついている」。トゥルゲーネフの作品に対する左右両面からの批評が可能であるのも，それに由来する。すなわち，「純粋芸術」による右からの貴族自由主義批評と「リアリズム芸術」による左からの革命的民主主義的批評との二つである。ほぼこのような図式によっているように思われる。[23]

たしかに，ここで問題の『中・短篇集』に対するドゥルジーニンの評論は，「純粋芸術」の観点によって貫かれているとみなしてよいであろう。トゥルゲーネフのうちにリアリズムを見る見解に対する反駁，トゥルゲーネフにおける社会的傾向をベリンスキーの「有害な」影響とみなして，作家の功績を他に求める見解などを通じて，その視点は明らかである。すなわち，「悪意のない，子供のような心をもった作家のなかに，ひとは社会的誤解のきびしい懲罰者を見ている。詩的な観察者のなかに，ひとは人類を喜び迎える社会的賢者を思い浮かべている。ひとは未曾有の魅惑的なイデアリストおよび空想家のなかに，リアリスト芸術家を見ている。……ひとはプーシキンの詩で養なわれた人間のうちにゴーゴリの継承者を空想している。……」。さらにまた「社会は，真の公正な，新鮮な詩を渇望している。そして常にむさぼるようにそれに飛びついてゆく。たしかに，この同じ社会は，時としてきびしい，全く緊張した実践的なパンフレット的な詩にとんでゆきたがる。しかし，これら二つの傾向を混同すべきではない。それらのうちの一つは長くつづき，明るさへ導くが，他方は必要が満たされれば燃えつき，退屈を催させる。これらの傾向のうちの前者の満足——これこそトゥルゲーネフの最も重要な功績である……おそらくトゥルゲーネフ氏は現代性と時代の実践的思想の犠牲となって，多くの点で自分の才能を弱めさえした。だが彼の前にはまだ時間が充分ある。彼の最近の作品は，わが詩人の直観が強くなってゆくことをわれわれに予想させる……」。[24]

一見これらに似た表現が，ドゥドゥィシキンにも見いだされることは確かである。『猟人日記』および「ムムー」を初め，その系統の作品について彼が語る場合，それはとりわけそうである。例えば，「ここでは作家たちは，経済思想を文学思想に変え，経済現象を中篇・ロマン・ドラマの形式で描写する仕事を受けもっている」，「『猟人日記』や『ムムー』におけるように，文学を或る特殊な社会問題の奉仕者にしてはならない」[25]等々。しかしながら，のちにドゥドゥィシキンの評論そのものにおいて明らかなように，そこでは彼なりの現実への接近，実生活の価値，生きるための義務ともいうべき労働の尊重が顕著である。このように実際のドゥドゥィシキンの評論そのものに接するとき，世にいう「純粋芸術」理論家としての彼のイメージは砕ける。あるいは少なくとも今日行なわれている

23) とりわけ См. Е. Ефимова, И. С. Тургенев-Семинарий, стр. 23-24. またラブレツキーは，特に“余計者”の形象に関して，「“余計者”とは貴族リベラリズムの文学的主人公である。まさにそのゆえに，“余計者”に対して右からも左からも公然と反対することが可能であった」といい，左右両面からの反対の可能性について言及している。(А. Лаврецкий, Белинский, Чернышевский, Добролюбов в борьбе за реализм, Изд. 2., М., Изд-во «Художественная литература», 1968, стр. 287.)

24) А. В. Дружинин, Собрание сочинений, т. 7. СПб., 1866, стр. 288. 294.

25) С. С. Дудышкин, Повести и разсказы И. С. Тургенева, Статья вторая и последняя. —«Отечественные записки», 1857, т. 111, № 4, отд. 2, стр. 55, 62-63.

水準を越えた説明が必要になる。[26] 本稿で特にドゥドゥィシキンの評論を中心的に取り上げる意義はここにある。[27]

Ⅲ

ドゥドゥィシキンの評論は，先ず彼の批評の意図と批評の基準の表明ないし説明から始まる。そのそもそもの意図，基準から見てすでに想像されるように，詰まるところ彼の問題は，芸術においていかに理想を純粋培養すべきかにあるのではなくて，いかに理想を改めて実現するかにある。これは，別言すれば，同じくベリンスキーのもとから出発しながらドゥドゥィシキンとチェルヌィシェフスキーとが別れてゆく分岐点といってもよいし，またベリンスキー継承における彼の「現実」概念の分化と称してもよいであろう。なお，本節と次の節では，整理のため各段落にナンバーを付するとともに，ドゥドゥィシキンの表現をできる限り当時の舞台にのせて理解するために，トゥルゲーネフの『文学的回想』，チェルヌィシェフスキーの「ロシア文学のゴーゴリ時代概観」，更にトゥルゲーネフの評論「ファウスト論」や，いまでは忘れられがちな青年期の劇作などを用いて注解を加えておこう。

〔1〕われわれの前に，わが最良の現代作家の一人の1844年から1856年にいたる，すなわち最近の12年間の，文学活動が示されている。ここには現代的なもの，生きたものが，どれほどあることか！ 興味あるもの，教訓的なものが，どれほどあることか！ ロシア文学において，この12年は無駄には過ぎ去らなかった。たしかにこの時期には，ゴーゴリはすでに書くことを止めており，レールモントフはおらず，文学がゴーゴリ，あるいはレールモントフやプーシキンについての思い出に生きていたことは認めなければならない。[28]

この12年間は，後年トゥルゲーネフが回顧して述べた自伝的記録によれば，彼の生涯の次のような時期にあたっている。すなわち，

「その年に彼イヴァン・セルゲーエヴィッチは文筆活動に入った——それほど大きくはない詩『パラーシャ』を，自分の名前をつけずに出版し，ベリンスキーと知合いになった。つづく2年間のあいだ，彼は詩を，更にポエマを書き続けたが，それらは認められるに値するものではなかったし，また認められもしなかった。そして1846年の末に外国に行き，その文筆活動を全くやめるかあるいは変えようと決心した。しかし，『ホーリとカリーヌィチ』と題する散文の短い一篇の成功によって文筆活動につれもどされた。その一篇は当時改めて再刊されたばかりの『同時代人』誌の編集部に渡しておいたものであった。それ以来文筆活動はやまなかった——そして昨年〔1874年—筆者〕著作集の第5版が

26) この点，ラブレツキーがドゥドゥィシキンの「右からの」“余計者”批判を，“余計者”の「環境との裂目」によるものと見なす解釈は，ソ連の解釈者のうちで特色がある。(См. Лаврецкий, Указ. кн., стр. 287.) 更に，ドゥルジーニンが“余計者”を「弁解」したのに対して，ドゥドゥィシキンはそれに「反対」したとするプールソフの解釈は注目に値するように思われる。См. Б. И. Бурсов, Вопросы реализма в эстетике революционных демократов, М., ГИХЛ, 1953.『ロシア・リアリズムの系譜』小沢政雄訳，p. 267.

27) 本稿脚注 7) 参照。

28) Д., 1.

出た。文筆活動が少し途絶えたのは，ただ1852年のことであったが，その年に И. С. はゴーゴリの死の追悼文を発表したために，あるいはもっと正確に言うならば，『猟人日記』の単行本の出版のために，1ケ月禁錮に処せられ，次いで自分の領地に送られたのだった。そこから彼が帰ってきたのはやっと1854年のことであった。」[29)]

周知のとおり，彼が文筆活動に入った「その年」1843年はトゥルゲーネフの生涯にとって二重三重に決定的な年であった。それはポエマ「パラーシャ」の出版によって文筆活動を始めた年であるだけでなく，その2月ベリンスキーの知己をえて活動の方向づけを得た年である。またポーリナ・ヴィアルドー夫人と初めて近づきになった年でもある。1841年5月ベルリン大学での留学を終えて帰国した彼は，ちょうど『オネーギン』のなかの若きレンスキーのように，ゲーテやシラーを巨匠と迎ぐロマンティックな青年であった。いまやベリンスキーの指導を得て，そのロマンティックな理想はより具体的な理想にとって代わられるはずであった。あるいは，理想のロマン主義的理解がその現実主義的な理解にとって代わられるべきであった。ちなみに，当時のロシア知識人におけるロマン主義からリアリズムへの移行は，フリーボーンのことばを借りるならば，次のごときものであった。すなわち，「それまでロシア知識人を支配していた気分は，1843年までに変化した。それ以前の10年間バイロン主義，シェリング崇拝，国民性の意味決定の企て，新しい政治意識への試みの第一歩などを伴ったロマン主義は，強まりゆくリアリズムの気分にとって代わられた。文学的表現の最も重要なメディアとして詩は散文に置きかえられ，シェリングの代わりにフォイエルバッハが現われ，またプルードン，フーリエ，ルイ・ブランのようなフランスの社会主義著作家たちの著書が登場した。国民性の問題は姿をかえて社会の再組織および社会的理想の問題となった。」[30)] 当時，若きトゥルゲーネフは，母の死後そのスパースコエの領地を相続するまでは，「貴族出身のボヘミアンの生活，貴族乞食の生活」[31)] のうちに余儀なく文学のさまざまなジャンル（詩，物語，批評，翻訳）に手を染め，たまたま『猟人日記』中の数篇が一部の読者層から好評をもって迎えられたものの，そのときにはすでにあの48年後のツァーリ政府反動化の「暗い7年間」が始まっていた。上掲の自伝的記録中の禁錮・追放はその間の事件である。1844年から48年まで，48年からニコライ一世の死の55年，クリミア戦争敗北の56年まで，ロシアの社会，政治とともに，その文学界や批評界，一般に知的世界は大きくゆれ動いていた。[32)]

19世紀のロシア文学の全体に対してプーシキン，ゴーゴリのもつ画期的意義については言うまでもないが，特にトゥルゲーネフにとっては，とりわけ小説に関して，その模範としての意義――前掲文中のドゥドゥィシキンのいわゆる「思い出」――は大きかった。1846年にトゥルゲーネフは，ある戯曲の批評[33)] において，ゴーゴリ，プーシキンに始まるロシア文学の「思い出」について語っている。すなわち，「わがロシアの芸術史および

29) Тургенев, Соч., XV, 207–208.
30) Richard Freeborn, *Turgenev: The Novelist's Novelist, A Study*, Oxford Univ. Press, 1963, p. 12.
31) П. В. Анненков, Литературные воспоминания, М., ГИХЛ, 1960. стр. 395.
32) 拙論「チェルヌィシェフスキーの美学理論（Ⅰ）」『スラヴ研究』No. 13, 1969, pp. 90–91 参照。
33) Рецензия—Смерть Ляпунова. Драма в пяти действиях в прозе. Соч. С. А. Гедеонова., СПб., 1846:—Тургенев, Соч., I, 257–271.

文学史は，その特殊な二つの成長が特徴である。われわれは外国の手本を模倣することから始めた。ただ表面的な才能をもち，おしゃべりで多作の作家たちは，国民との生きた結びつきを全く欠いた彼らの作品のなかで，他国民の才能や思想の反映しか表わさなかった――だからといって彼らは独創性，国民性について得意げに解釈しなかったわけではない……他方，社会において変革が音もなく静かに進行していた。外国の原理はつくりかえられ，自国の血汁に同化された。感受性豊かなロシアの本性はあたかもこの影響を待ち望んでいたかのように日毎，いな時間毎に発展し成長し自己の道を歩んだ。」[34) ここでトゥルゲーネフのいう「変革」とは，直接には，ゴーゴリに明らかなリアリズムへの志向のことを意味している。すなわち「ゴーゴリによってまかれた種は――われわれはこれを確信しているのであるが――いまや多くの識者，多くの天賦の才のなかで音もなく実っている。時がくる――すると若い小さな森がその孤独な樫の木のまわりに成長するであろう。……『検察官』の出現の時から10年の年月が過ぎ去った。なるほど，この期間にロシアの舞台でゴーゴリ派のうちに数えられるような作品は一つも見られなかった（もっともゴーゴリの影響はすでに多くの点で目立っているが)。しかしこの時からわれわれの意識，われわれの要求のうちに驚嘆すべき変革が起こったのである。」[35) ゴーゴリがその『検察官』の素材を彼が「普遍的天才」と称したプーシキンから受け取っていることはよく知られている。それだけでなく一般に上述の「変革」の方向づけを導き入れた画期的な作品として，プーシキンの「詩小説」『オネーギン』を見ることは，大方異論のないところである。この「ロシアのバイロン的主人公」オネーギンこそその後ロシア・リアリズム文学が長い間携わることとなった主人公の一典型をなすものであった。すなわち，遅れたロシアの農村生活のうちに生いたったタチヤーナとの対置において描きだされた，バイロン的理想を追い求める都会の貴族知識人オネーギンの不幸な意識である。プーシキンのために激烈な追悼詩「詩人の死」を書いたレールモントフのロマン主義主人公ペチョーリンにおいて，このテーマが更に展開を見たことはこれまた言を俟たないところであろう。

〔2〕批評の見地からは，これらの三人の作家が，わが文学を全面的に支配していた。批評は，これら第1，第2，第3の作家のいずれかに傾倒する以外のことをしようとはしなかった。批評は，プーシキンやゴーゴリのような作家たちの或る傾向，あるいは他の傾向を，理解していた。彼らには二つの傾向があった。そして批評は，それが共鳴するところのものに従って，或る傾向または他の傾向に，あえて傾倒していた。歴史科学の発展の影響およびわが祖国の運命を親しく知ったことの影響のもとで，わが文学の最近の時期のこれら三人の巨星のもっていた主要な傾向のこの不一致から，批評の志向の不一致から，何か新しいものが，まだ不確定ではあるがいわば明らかに以前のものとは似ていない何か新しいものが，おのずからこの時期に作りあげられていた。それは，何か独自なもの，しかし全く独自なというためには，まだ充分には明らかにされていないもの，であった。[36)

この時期（1844-56年）の批評界における「まだ不確定ではあるが，何か新しいもの」をみずから明確にしようとした主要な試みの一つは，1855-56年に執筆されたチェルヌィ

34) Тургенев, Соч., I, 258.
35) Тургенев, Соч., I, 258.
36) Д., 1.

シェフスキーの「ロシア文学のゴーゴリ時代概観」であろう。これはベリンスキーの名前をあげることさえ禁じられていた「暗い7年間」の著作に属するが，単に「わが文学のゴーゴリ時代の批評」[37]家ベリンスキーの批評的見解を引き継ぐだけでなく，それを新しい時代に発展させたものである。すなわち新しい諸条件のもとでの自然派の「いっそう高い発展」[38]が説かれている。まず，彼にとっても，ロシアの最初の国民詩人はプーシキンであり，プーシキンは，国民に詩形式を教えただけでなく，つづく画期的なレールモントフ，ゴーゴリへの道しるべでもあるかのように，[39]その詩形式にしかるべき内容を盛る方向を――彼自身においてはそれほど実現されなかったとはいえ――示した。[40]チェルヌィシェフスキーにとって，ゴーゴリはプーシキンに比すべき芸術的才能を時代の要求と結びつけた人であり，ここにいわゆる「ゴーゴリ時代」が始まる。そして彼にとって，レールモントフは「プーシキンを含めてそれまでのロシアの詩人たちのうちの最も独創的な詩人」である。[41]チェルヌィシェフスキーによれば，ゴーゴリの特長は，任意の観念からの「分析」とは異なる，人間性と理性にもとづく「批判」――およびその最も有効な形式としてのサタイアとカリカチュア――にあり，[42]読者はそれによって「ある一定の道徳的努力の方向」を強いられる。[43]『死せる魂』や『検察官』においてゴーゴリの用いたサタイアやカリカチュアは，それらが単に大げさな牧歌でないばかりか，実在の人物の忠実な似顔でもないからこそ，リアリスティクなのである。[44]

さて，チェルヌィシェフスキーは，このように当時の文学活動に対するベリンスキー的批評を発展させているだけでなく，更に「ゴーゴリ時代の批評家」ベリンスキー以後の批評界そのものにおける発展に論及している。そこでは，ゴーゴリに対する評価の是非およびより一般的に多少とも一貫した思想的見地の有無にもとづいて，諸批評家に対する批評がなされる。したがって，そこからは当時の批評界におけるさまざまな――前掲文中ドゥドゥィシキンのいわゆる――「批評の志向の不一致」をうかがうことができる。例えば，フランス・ロマン主義[45]の影響と形式の尊重とのゆえにゴーゴリに批判的であった H. A. ポレヴォーイ，[46]無定見に細部にのみとらわれゴーゴリに対して否定的であった O. И. センコフスキー，[47]他方，ゴーゴリを肯定的に評価するものの，その真意がつかみにくいデ

37) Н. Г. Чернышевский, Полное собрание сочинений в пятнадцати томах, М., ГИХЛ, 1939-1953, т. III, стр. 135.（以下，このテキストから引用する場合は頭文字 Ч. をそえて巻数をローマ字，ページをアラビア数字でそれぞれ記す。）
38) Ч., III, 191.
39) Ч., II, 516; III, 16-20.
40) Ч., II, 474, 516.
41) Ч., II, 501-502; III, 20, 110.
42) Ч., III, 17-18.
43) Ч., III, 21.
44) Ч., III, 244-245.
45) チェルヌィシェフスキーによれば，このフランス・ロマン主義は，シェリング主義者ナデージュヂンによってえせロマン主義――中世の真のロマン主義のあわれなまねごと――として批判されていた。См. Ч., III, 183-188.
46) См. Ч., III, 22-43.
47) См. Ч., III, 44-47.

ィレタントの П. А. ヴャーゼムスキー，П. А. プレトニョーフ。[48] 批評界におけるこれらの「志向の不一致」は，チェルヌィシェフスキーによれば，ベリンスキーの死後特に目立ち始め，それまで伏在していた批評家たちの間の思想的立場の違いが，些細なことを機縁にして顕在化した。[49] そこで彼自身は，作家の才能と共感とを正しい社会的傾向と結合させることにこそ批評家の任務があると結論することになる。[50] そして例えば『モスクワ人』のスラヴ派編集者とも関係のあった А. Н. オストロフスキーの劇作『貧乏は罪ではない』（1854年）が，スラヴ派からは，ロシアの正統的慣習と甘美な感傷とのゆえに迎えられたのに対して，チェルヌィシェフスキーは，その劇作にもうかがわれるオストロフスキーの，家長制家族の苛酷さとモスクワ商人の強欲さとを描き出す才能を強調する。「才能の力は真理のうちにあるのであって，誤った方向は最大の才能さえをも破壊するのである」。[51]

知られているように，「ロシア文学のゴーゴリ時代概観」が『同時代人』に連続的に公表され終わると，その直後，当時『読書文庫』の編集者になっていたドゥルジーニンによって反論「ロシア文学のゴーゴリ時代の批評とそれに対するわれわれの態度」が出され，（1856年），以後プーシキン，ゴーゴリおよびベリンスキーの評価をめぐり，更に一般的に広く批評界において，チェルヌィシェフスキーに対する В. П. ボトキン，П. В. アンネンコフ，А. В. ドゥルジーニンの対立は特にきわ立ったものになる。[52] その対立は，「プーシキン主義」か「ゴーゴリ主義」かという，論争に伴いがちな極端なレッテルのもとに宣伝されたが，問題の所在は，要するに芸術の対象を美のみに限ることと対象を諷刺されるべき生活の暗黒面にのみ限ることとの，いずれが現実を歪め芸術家の自由をそぐか，ということにあったように思われる。[53]

〔3〕トゥルゲーネフ氏は文学および批評におけるこの志向にきわめて活動的に参加した。そしてこの時期に彼の力も充分に発揮された。彼は，彼自身の固有の才能，文学の方向づけ，美学的諸問題，ロシア生活の理解に，大いにたずさわった。それゆえ，1844年から1856年までに書かれ，いま一緒に集められたところの彼の中篇と短篇を検討することは，われわれに多くのことを説明してくれる。

その検討は，何よりもまず，生活に対する見解そのものにおける動揺と変化を説明してくれる。つまり，各作家の確信，各作家の達している知的高さに応じた，種々の作家の種々の見解における動揺

48) См. Ч., III, 131–132.

49) なかでもつまらぬけんかの例は，『読書文庫』1855年9月号に掲載された Д. В. グリゴローヴィッチのふざけた小話——そこではチェルヌィシェフスキーをモデルにした食客チェルニェフスキーが登場する——を機縁にしたものなどである。См. Ч., XIV, 462; II, 655–662. Cf. Charles A. Moser, *Antinihilism in the Russian Novel of the 1860's*. The Hague: Mouton, 1964, pp. 86–88.

50) См. Ч., III, 303–309.

51) Ч., II, 240. とはいえ，チェルヌィシェフスキーは文学的表現形式の才能の価値を軽視しているわけではない。この側面に関しては，Н. Ф. シチェルビーナ評（Ч., IV, 528–544）；トルストイ初期作品評（Ч., III, 429–430）参照。

52) 拙論「チェルヌィシェフスキーの美学理論（I）」『スラヴ研究』No. 13, 1969, p. 96 参照。См. Б. П. Городецкий, А. Лаврецкий, Б. С. Мейлах (ред.), История русской критики в двух томах, М.–Л., Изд-во АН СССР, 1958, т. I стр. 444–469.

53) См. История русской критики, т. I, стр. 462.

と変化を説明してくれる。[54]

われわれは，さきに，1844年から1856年にいたる12年間がトゥルゲーネフの生涯においていかなる時期であったかを，彼の自伝をたよりにして概観した。ここで上述の「文筆活動」開始（1843年）以前のトゥルゲーネフの準備的な試作について，初期における彼自身の文学論について，更にいくつかの劇作について，簡単に言及しておこう。これらは以下のドゥドゥィシキンの叙述においても省かれているからである。

伝えられる彼の作品のうち最も日付けの早いのは，1834年バイロンの『マンフレッド』をなぞったメロドラマ的な劇詩「ステーノ」である。これは，イタリアを舞台にして，少女ジュリアから捧げられた純愛にもかかわらず生活に対する確信喪失のためにみずから死を選ぶに至る哲学青年の観念的ドラマであって，ロシア的な「オネーギン」以上にバイロン的な作品といえよう。コスモポリタン的なイタリアの舞台からロシアの舞台への復帰は，後に述べることになる詩小説「パラーシャ」（1843年）において初めて試みられる。

また前述の40年代「ロシア文学のゴーゴリ時代」におけるトゥルゲーネフ自身の文学観を知るためには，1844年ヴロンチェンコによるゲーテ『ファウスト』のロシア語訳が出版されたさいに彼が批評の形で発表した「ファウスト論」[55]を見るのが最適であろう。これは，のちに1860年講演の形でより一般的に展開された彼の文学論の萌芽をなすものであるが，そこではその後のトゥルゲーネフの作品において繰り返したち現われることになる人間関係のテーマが，理論的な形で言い表わされている。つまり，個人と社会，個人の幸福と社会の発展法則との関係の問題である。この問題に対してトゥルゲーネフはいかなる方向にその解決を求めていたのであろうか。「ファウストのあらゆる『和解』は人間的現実の領域外にあって不自然である……。しかし他の和解については我々は今のところ単に夢想し得るにすぎない……」[56]と若きトゥルゲーネフはいう。「人間的現実の領域」，すなわち現実の内部での解決は，絶望なのであろうか。彼によれば，「この悲劇が未完成であるというところに，その偉大さが存するのである」。[57] ここにおいて彼はゲーテの『ファウスト』にことよせて文学における自分自身の人間論を語っている。すなわち，彼の「ファウスト論」によれば，「私は『ファウスト』をエゴイスティックな作品と呼んだ。……しかしそれは他に仕方があり得たであろうか。あらゆる人間的，地上的なものの弁護者，あらゆる似而非理想主義的，超自然的なものの仇敵たるゲーテが初めて，人間一般の権利ではなくて，個々の人間，限界のある情熱的な人間の権利を擁護したのである。彼は人間には打ち砕きがたい力がかくされてあること，人間は外部からのどんな支柱もなしに生活し得ること，そして自分自身の疑惑がどんなに解決できないとしても，また信仰

54) Д., 1-2.「昔のことを深く究めたのに，現在のことを忘れたのは悪いことだった。現在活動している作家のほとんど一人も然るべく評価されはしなかった」という観点からチェルヌィシェフスキーは，トゥルゲーネフの『中・短篇集』に関するドゥドゥィシキンの大論文が『祖国雑記』に掲載されたことを歓迎している。См. Ч., IV, 696,

55)『祖国雑記』1845年第1号に掲載された。Тургенев, Соч., I, 214-256,

56) Тургенев, Соч., I, 238. 河野与一，柴田治三郎訳『ハムレットとドン・キホーテ』岩波文庫，p. 86 参照。

57) Тургенев, Соч., I, 238. 河野，柴田訳，前掲書，p. 86 参照。

と信念がどんなに貧しいとしても，人間は幸福になり，しかも自己の幸福を羞じない権利と能力を有していることを示した」。[58] ここに示されているのは，「幸福を羞じない権利と能力を有している」「個々の，情熱的な人間」，つまりペチョーリン的人間であるといってよいであろう。しかし，トゥルゲーネフはすぐ続けて付け加える。「我々は人間の発展がかような結果に留まり得ないことを知っている。我々は，人間の礎石は分割不可能な単位としての人間自身ではなくて，永遠の確固たる掟をもった人類であり社会であるということを知っている。」[59] したがって，「やがて別の時期が来ると，『ファウスト』を壮大な，見事な作品と認めることをやめないにしても，我々は前進し，別の，天分は少ないかも知れないがもっと強さのある性格を目指し，別の目標に向かって行く。……繰り返して言うが，ゲーテは詩人としては匹敵する者をもたない。しかし今日必要なのは詩人だけなのではない」。[60] 約言するならば，トゥルゲーネフは，個人と社会との関係の問題に対して，すなわち，いわばペチョーリン的人間のいわゆる現実との「和解」の問題に対して，その解決を「人間的現実の領域外」に求めず，あくまでもそれを現実の内部に求めてゆこうとするのである。おそらくはベリンスキーから教えられたと思われる，この社会的で現実的な「別の目標」への方位は，のちの作品における人物の特徴づけ——貴族知識人の内的分裂——の基礎になったものと考えられる。[61]

更に，個々の人物の肖像というよりは，それらの個人の意識とその分裂とを人と人との社会関係のうごきのうちに表現しようと試みた出色の作品として戯曲「村のひと月」(1850年) をあげることができる。これは，女主人公ナタリヤに対する第一の主人公ラキーティンの報われぬ恋愛関係と第二の主人公ベリャーエフに若き日の情熱の幻を追い求めるナタリアの恋愛関係との織りなす人間関係のうちに，人間の諸情念の笑いを誘うまでの空しさを明るみに出している。この五幕全体の劇構成の試みは，初期トゥルゲーネフにおけるロマン成立の契機をなすものと見なすことができるであろう。

ほぼ上述のようなロシア生活ならびに社会意識への志向，散文小説（ロマン）の形成——以下ドゥドゥィシキンの検討の対象となる初期トゥルゲーネフの作品の前提になっているのは，これらである。

〔4〕作家の理想〔的人物—筆者〕は，作家の追求するイデーに依存している。たとえ作家自身が自分には理想がないと言っている場合にも，立派な各作家には必ず理想があるものである。ただ全く無関心な場合にだけ，すべてを無差別に記述することが起こりうるが，そのような記述からは何も出てこない。生活に対して理想がいかなる関係をもつかは，まさに同じ問題の第二の半分をなしている。

現代の科学，現代の生活によって作りあげられているようなそのような広さにおけるイデーと同じ水準に立つこと，イデーが歴史の最新のことばとして帯びているところの，そうした意味におけるイデーと同じ水準に立つこと——これは，各々の作家の主要な要求の一つであるとともにその功績の一

58) Тургенев, Соч., I, 235. 河野，柴田訳，前掲書，p. 83 参照。
59) Тургенев, Соч., I, 235. 河野，柴田訳，前掲書，p. 83 参照。
60) Тургенев, Соч., I, 238. 河野，柴田訳，前掲書，pp. 86–87 参照。
61) トゥルゲーネフ自身，さきの引用につづいて，おそらくはベリンスキーを念頭において「我々は（……），乞食を描いた見事な絵を見て『再生の芸術性』を歎賞することができます，今日乞食が存在し得ることを思って悲しみ憂うる人々に似て来た」と述べている。Тургенев, Соч., I, 238. 河野・柴田訳，前掲書，p. 87 参照。

つでもある。このイデーと何の関係をももたないものは，現代文学において意味をもたない。しかし，わがロシア作家にとっては，現代のイデーの高みに立つだけでは，なお不充分である。少なくとも，問題を最終的に解決することにはならない。わが作家は，彼がその上にイデーを生きさせているところの土壌に対するイデーの関係，イデーに対して状況の役を果たすべきところの社会に対するイデーの関係をも示さなければならない。[62] もしこれらの関係が全く否定的であるならば，そのときにはそれらの関係をいかに和解させるべきか。もし作家がそれらの関係に調和がありうることを見いだした場合には，その作家は自分のイデーをいかなる形で表現するか。[63]

われわれは，さきにドゥドゥィシキンに関して，40年代にはまだ時代との関係で文学現象を評価していたが，50年代に入るとその考え方を変えて，「純粋芸術理論の擁護者」として登場するという評価があるのを知った。[64] ところがいま1857年に彼自身の述べている文学批評の基準，いわば彼の批評基礎論を見てみると，そこでは，文学作品における作家の観念と時代の生活との関連が二重の意味で強調されていることが分かる。すなわち，文学活動における諸観念は，その土壌でもあり状況でもある，時代の歴史的・社会的生活にもとづくものであり，かつまた，これらとの関係においてのみ意味をもつというのである。

このようなドゥドゥィシキンの文学批評の基準，いわば批評基礎論を，当時の批評界のうちにおいて見るならば，それが単に――前述の――「プーシキン主義」純粋芸術派か「ゴーゴリ主義」自然派かというような二分法では割り切れないものであることは明らかであろう。この二分法を前提とすれば，ドゥドゥィシキンの立場は，形式尊重のポレヴォーイやディレタントのヴャーゼムスキー等よりも，むしろ生活尊重のチェルヌィシェフスキーに近いことになる。しかしながら，真の問題は，同じように文学の現実的「土壌」，

62) チェルヌィシェフスキーはこの点に関して，「これは正しい」と認めているが，しかし，「わがロシアの作家にとっては……なお不充分である。……わが作家は……示さなければならない」は，正確ではないように思われる，と述べ，「彼によって描かれる社会に対する思想の関係を規定しなければならないのは，一体なぜ，まさにわが作家であって，一般にあらゆる作家ではないのか。この義務はドイツの作家にも，イギリスの作家にも，フランスの作家にも等しく課せられており，それらのすぐれた作家のどの一人といえども，この義務を回避しはしなかった。――もしも中国人あるいはペルシャ人にも現在すぐれた作家がいるならば，勿論彼らは彼らによって描かれた社会に対する自分たちの理想の関係を示している。あるいは生活に対する理想の関係を規定する際に，他の作家たちがそれをはばからなくてもよいような何か特殊な条件がロシアの作家の上にはあるのだろうか」と問うている。Ч., IV, 697.

63) Д., 2. チェルヌィシェフスキーは，ドゥドゥィシキンの「もしこれらの関係が全く否定的であるならば……，もし作家がそれらの関係に……いかなる形で表現するか」ということばを引いて，もしもわれわれがまちがっていなければ，ドゥドゥィシキンが述べているところの「作家にあっては，理想は必ず彼をとりまく生活と調和したものでなければならない」という考えが表わされている。更に「もしもこの条件を彼が考慮に入れていたならば，彼の意見を正しいものと呼ぶことはできまい」と述べ，次のように続けている。「では一体なぜ理想は必ずや現実と和解したものでなければならないのか。この和解は……シェクスピアにさえも存在しない。……ハムレットとオフェーリヤ，ロメオとジュリエット，オセロとデスデモーナ，彼らはすべて自分や他人に多くの厄介や苦しみをかけた。シェクスピアは彼らのうちの一人をも『状況との調和』において示すことができなかった。シェクスピアのまさにその自若たる天才が果たさなかったところの義務をロシアの作家に課すというのはなぜか……彼はホメロスから1857年までのすべての詩人を一人残らず非難するのだろうか」。См. Ч., IV, 697.

64) 本稿Ⅱ参照。

社会的「生活」との関係とは言っても，その現実に対して臨む態度が――前述の――「分析」か「批判」かという点にあったと考えられる。すなわち，ある任意の観念によって生活の諸事象を「分析」描写するにとどまるか，生活の現実そのもののうちに切り込んで「批判」し「ある一定の道徳的努力の方向」を明らかにするか，という点に存したと考えられるのである。もともと本稿のひそかなる意図は，この問題を基点にしてトゥルゲーネフのリアリズム文学の質を問いなおすことにある。しかしいまは，それを念頭におきながら，ドゥドゥィシキンの所論を追ってゆかなくてはならない。彼はつづけて次のように主題を定めている。

〔5〕上述のことこそ，まず第一に重要な問題であり，いまこの問題に対する解決をわれわれが求めようとしている作家〔トゥルゲーネフ――筆者〕は，幸いである。トゥルゲーネフ氏は，彼の作品の一つ一つによって，このように考えてよいことを示している。それゆえ，われわれは何よりも先ずこの主要な問題の解決に取りかかろう。[65]

一般に「生活に対する理想の関係」をライト・モチーフにした代表的作家として初期のトゥルゲーネフをとりあげることには異論がないであろう。前に見たように，そこには，バイロン的理想をロシア的生活の舞台に復帰させようとする志向があった。ファウスト的理想を現実の内部において解決しようとする志向，新しい「目標」の設定があった。しかしながら，ドゥドゥィシキンは，同じこの問題の解決をトゥルゲーネフの作品に求めることから出発しながら，実は，のちに見られるように，現実に対する――前述の――「批判」的関係ではなしに「分析」的関係に解決の方途を求めた。つまり，作品の一つ一つを追いながら，ついには『ルーヂン』のなかの自己満足した地主レジネフに現実との和解を見いだすのである。だがあまり先を急がずに，彼の論旨の展開に従ってゆきたい。

〔6〕生活に対する理想の関係は，わが文学の焦眉の問題になった。生活と理想との間の，いくらかでも論理的な関係を見つけようとして，そのために，わが作家たちは，最近みずからの歴史的意義を喪失してはいないが現代生活にとってはもはや最高の指導的原理の意義は失ってしまったところの，わが生活のそのような側面に，疑問の解決を求めた。[66]

文学における「生活に対する理想の関係」は，単に文学的形式と生活の現実的内容との関係にはとどまらない。すなわち，例えばプーシキンやレールモントフによって見いだされた美しい文学的表現の形式をいかにその後の生活事象と結びつけるか，ということにはとどまらない。むしろ，その「関係」の内実は，文学的表現の才能が生活の真の現実的内容の描出に生かされて新しい表現形式を創出しうるか否かにかかっている。それは端的に生活内容と理想内容との内的な関係といってよい。

われわれはさきにオストロフスキーの戯曲『貧乏は罪ではない』（1854年）をめぐって

65）テキストでは次のように続いている。「これがわれわれの第一論文の主題である。」Д., 2.

66）テキストでは次のように続いている。「トゥルゲーネフ氏は，この生活習慣にも触れたが，それはどのような点からか，――これはのちに第二論文のなかに見るであろう。」Д., 2.

批評が二様に分かれたことについて述べたが，それは，この作家の豊かな文学的才能がまだ当時の家長制商人家族のリアルな内容を表現し尽くしえていないことによるのである。[67] すなわち，ドゥドゥィシキンのことばで言い表わすならば，生活に対する理想の「論理的な関係」が見いだされえなかったために，この場合オストロフスキーは，家父長制社会の生活と深く結びついた甘美な感傷に多少とも筆を託さざるをえなかったのである。更に，理想形成の才能が現実的生活と内的に結びつかず，そのために結局は伝統的な美しい表現形式と過去の遅れた生活内容との和解に堕してしまった特徴的な例として，M. B. アヴヂェーエフの場合をあげることができよう。このアヴヂェーエフの『長篇・中篇集』(1854年）が出版されたとき，それに関して，チェルヌィシェフスキーは，この作家の豊かな才能にもかかわらず，そこにはプーシキンやレールモントフの表現形式からの借用が多く見られ，かつ社会生活の現実的内容を表現する美しさには乏しいと批評している。[68] 後述のように，ドゥドゥィシキンにも同様の趣旨の批評が見られる。[69] この点で二人の批評家が一致していることは，注目に値する。これは，彼ら二人の対立が，単に耽美的な文学形式と倫理的な社会内容との対立にあったのではないことを示している。

ところで，ここで問題の作家トゥルゲーネフについてはどうであろうか。「生活に対する文学の関係」について，そのころ最も評価の分かれた彼の作品に中篇「ムムー」(1852年執筆，1854年出版）がある。これは短篇「はたごや」(1854年）とともに，トゥルゲーネフが彼の母の領地スパースコエで経験した支配的な地主＝農奴生活から素材を得た作品である。聾唖の下男ゲラーシムが，地主貴族の，とある気紛れから，ただ一つ最後の愛情を寄せていた小犬までをも無惨に殺さざるをえなくなるその物語りは，誰一人その見事な美しさを嘆賞しないものはいない。当時『同時代人』批評欄担当であり，トゥルゲーネフの詩才を高くかっていたドゥルジーニンは，それを「小さな美しい絵画」[70] とたたえた。しかし，彼によれば，その美事な美しさは，「時代に則した現代性と実践的な思想」のために犠牲に供されている。すなわち，ドゥルジーニンによれば，「ムムー」の文学的美しさは，その社会内容のゆえに，もっと一般的にいえば何らかの生活に関係しているがゆえに，「何の意義も持たない」のである。[71] 他方，この作品はまた，それが，理想を生みだす生活を見事に描き出し，理想と関わりのあるロシアの社会関係を明示しているがゆえに，熱狂的に迎えられた。しかも，ゲルツェン，И. С. アクサーコフというような相異なる思想の持主から同時に歓迎されたのであった。前者からは，それが農奴制への「詩的な起訴状」[72] であるがゆえに，後者からは，それの主人公ゲラーシムが「ロシア人民の理想

67) なお，喜劇『収入ある地位』(1856年）に対するチェルヌィシェフスキーの批評（См. Ч., IV, 731–735),『雷雨』(1860年）に対するドブロリューボフの批評「闇の王国」参照。(См. Н. А. Добролюбов, Собрание сочинений в девяти томах, т. 5, М.–Л., ГИХЛ, 1962, стр. 7–139.)

68) См. Ч., II, 210, 220.

69) 本稿脚注 138) 参照。

70) Дружинин, Собрание сочинений, т. 7, СПб., 1866, стр. 325.

71) См. П. Е. Липатов, «Муму» И. С. Тургенева.—В сб.: Творчество И. С. Тургенева, М., Учпедгиз, 1959, стр. 146–147.

72) А. И. Герцен, Собрание сочинений в тридцати томах, т. XIII, М., АН СССР, 1958 стр. 177. 本文中のゲルツェンのことばは，直接には『猟人日記』について述べられたものであるが，同系列の「ムムー」についても同様にいえるであろう。

化」[73] であるがゆえに。したがって，ひとくちに「生活に対する理想の関係」といっても，いまや，いかなる生活に対していかなる理想の関係か，ということが常に問われなければならないであろう。前掲文中でドゥドゥィシキンが，その時代の生活におけるまさに現在的な「側面」と過ぎ去りつつある「側面」との区別を行なっているのも，理由のないことではない。[74]

〔7〕最後に，或る時代に支配的な芸術理論の建設も，生活に対する理想の関係に依存している。10年前われわれは中篇や長篇を読んで始終眉をひそめたものだ。今日われわれは中篇を読んでも長篇を読んでも，始終微笑を浮かべている。これには何の意味もないと諸君は考えるだろうか。いや，これは理論によることなのである。わが文学精神のもつこのように快的な気分についても，また，はっきりしないままにしておくべきではないであろう。以下に見るように，文学精神もやはり同一の源泉に由来するものだからである。[75]

ここで言われているように，中篇や長篇が顰蹙をかっていたときから微笑で迎えられるようになったときまでの約10年間は，またロシアにおいていわゆるロマンが成立した10年間に当たっている。いまかりに1857年の時点からその「10年前」における散文文学について振り返って見ると，のちの大ロマン作家ドストエフスキーもまだその書簡体の『貧しき人々』（1846年）によってやっと作家活動を始めたばかりであり，グリゴローヴィッチの中篇『不幸者アントン』（1847年）もまだロマンというには程遠い作品である。『1847年のロシア文学観』においてベリンスキーは，ゲルツェンの『誰の罪か』（1847年）とゴンチャローフの『平凡物語』（1846年）とを掲げ，それらには，「長篇小説と中篇小説とが作家に対して彼の才能，性格，趣味，方向等の優越的特質の関係において完全なひろがりを与える」仕方が最もよく表われていると述べている。[76] このように「10年前」なお創出期にあった中・長篇には，創出期に伴いがちな性格描写の生硬，現実描写の不正確さ，筋の欠陥があった。更に，題材や構成の点において，ドストエフスキーに見られるようにゴーゴリからの借用が，ゴンチャローフに見られるようにプーシキンからの借用が，目立っていた。ドゥドゥィシキンも――前掲文中でいうとおり「以下に見るように」――トゥルゲーネフの最初の中篇のいくつかのうちに，同様にレールモントフ，ゴーゴリからの未熟な借用を見いだしている。したがって，いまやわれわれはドゥドゥィシキンとともにトゥルゲーネフの作家活動そのもののうちに立ち入らねばならない。

〔8〕かようにして，われわれは問題を次々に取り出すことによって，この文学運動へのトゥルゲーネフ氏の参加を示し，ひいては，もしできることなら，彼の才能における，そのこまかい観察的頭脳，対象の詩的側面を摑む能力，あらゆる高貴なもの，崇高なものに対する共感の特性をなしている，とらえがたい価値を説明しよう。[77]

---

73) П. Е. Липатов, Указ. статья, стр. 146 に引用されている。
74) ただし，彼がこれについて論じているのは，第二論文においてである。
75) Д., 2.
76) В. Г. Белинский, Полное собрание сочинений, т. X, М., АН СССР, 1956, стр. 316.（以下このテキストから引用する場合には巻数をローマ数字，ページをアラビア数字でそれぞれ記す）。ベリンスキー『ロシア文学評論集（II）』除村吉太郎訳，岩波文庫，p. 80 参照。
77) Д., 2-3.

Ⅳ

本節においても整理と注釈の仕方は前節に従うが，用いる資料は前記の『文学的回想』とならんで「プーニンとバブーリン」のような自伝的作品のほか，内容上ベリンスキー関係のものにも大巾に及ばざるをえない。ここでドゥドゥィシキンは，作家トゥルゲーネフと批評家ベリンスキーとは文学において互いに買収し合い，裁くものと裁かれるものとが同一人格になっていると言い切っているからである。しかし，ドゥドゥィシキンの批評はもともとそれほど文学形式や制作方法にはかかわっていないので，若きトゥルゲーネフにおける詩から散文への歩みの意義，またレールモントフとの比較におけるバラトゥインスキーの作品の価値にはあまり立ち入らない。

〔9〕トゥルゲーネフ氏の散文活動の始まりは1844年である。だが彼の詩的活動はそれ以前から始まっていた。今度出された版においてその詩的活動がなぜ省かれたか，その理由をわれわれは知らないわけではない。しかし，トゥルゲーネフ氏の詩的活動と散文活動との間の結びつきは，少なくとも批評をする場合には，それを省いてはならぬほど緊密なのである。トゥルゲーネフ氏は，詩によって活動を始め，1847年までそれを続けた。こまかい（小詩の）作品は脇におくとしても，彼の三つのポエマ，すなわち，「パラーシャ」，「会話」，および「アンドレイ」については，それを述べないわけにはいかない。第1のものは1843年に印刷され，最後のものは1846年に印刷された。したがって，それは，トゥルゲーネフ氏の全集に収められている「コーロソフ」（1844）が，すでに書き上げられていた時期のことである。[78]

トゥルゲーネフは，ある自伝的な中篇のなかで，スパースコエで過ごした少年時代の思い出を語っている。「スパースコエで，少年は，田舎で育てられた者だけが知るようにして，鳥や，樹木や，木の葉を知ることを学んだ。またここで，自然のみならず詩をも教えてくれる奇妙な先生達を見つけた。美しい中篇小説『プーニンとバブーリン』の中で，ツルゲーネフは詩の好きな一人の農奴を描いている。その農奴と一緒に草の上に行って坐って，詩を読んでもらったのである。」[79] 前述の劇詩「ステーノ」は，1834年彼がモスクワ大学からペテルブルク大学に移り，プーシキンの友人でロシア文学講座を担当していたプレトニョーフ教授の指導下にあったころの試作である。後年の『回想』[80]において，彼はこの作品を「子供のような拙劣さでバイロンの『マンフレッド』を奴隷的に模倣した全く不格好な作品」[81] と称しているが，或る日講義のあとでプレトニョーフ教授は，「しかし，お前のなかには何ものかがある！と指摘した」。そして「このことばは彼のもとへ数篇の詩を持参する勇気を私に起こさせた」[82] と語っている。同じ『回想』によれば，「当時は精神的にはおちついた，そして外的にはやかましい時代であった。そして談話は支配的な風潮に合わせられていたが，疑う余地のない才能，強力な才能は，実際に存在し，深い痕跡を残した」。[83] そして「当時の私にとっては，また多くの私の同年代の人々にとってと同

78) Д., 3.
79) アンドレ・モロワ『ツルゲーネフ伝』，（大塚幸男訳）河出書房刊，昭和16年，p. 15.
80) П. А. プレトニョーフ家の文学の夕べ。
81) Тургенев, Соч., XIV, 11.
82) Тургенев, Соч., XIV, 11.
83) Тургенев, Соч., XIV, 16.

じく，プーシキンは何か一種の半神のようなものであった」。[84] 前述の「ステーノ」はただ一つ孤立した作品ではなく，伝えられていない百篇もの詩作があったといわれ，また1838年以後には数篇の小詩，長詩が『同時代人』『祖国雑記』に掲載された。[85]

〔10〕トゥルゲーネフ氏のそれらのポエマは次のような文学的確信の影響のもとで公衆の中に現われた。（われわれはそれらの確信を知る必要がある。なぜなら，トゥルゲーネフ氏自身の活動傾向も，またそれらの確信が公衆に受け入れられたさいの感情も，それらの確信と緊密に結びついているからである。）すなわち，

「パラーシャ」と「アンドレイ」の作者は，『現代の英雄』と『死せる魂』への完全な心酔によって，理想と状況とを与えられた。その理想とは，教養はあるが自分のなすべき活動を見いだせない若い人間……かの“余計”者である。状況とは，ゴーゴリによって描かれたあのわがロシアの町や村の，あの生活である。[86]

「パラーシャ」は，タチヤーナを手本にしたような典型的な田舎娘が，或るヴィクトル・アレクセーイチなる人物と恋におち，やがて結婚するという，筋の運びに乏しい，69節からなる「詩小説」（副題）である。容易に予想されるように，そこでは多くのものがプーシキンから借用されているが，その女主人公パラーシャのうちには，恋愛によって人生に目覚め，あくまでも情熱的でありながら感傷に走らない素朴な娘，以後トゥルゲーネフの作品にしばしば現われてくる女主人公の原型が見いだされる。それに対して主人公ヴィクトルは，パラーシャの情念の誘惑者でありながらみずからはロシアの生活に感情と意志をすりへらし人生に幻滅を感じながら，しかも知性において高慢かつ自己中心のバイロン的主人公である。最後は結婚に落着いているものの，まさに“余計者”のひな型といってよいであろう。

さて，われわれはさきに，トゥルゲーネフがその「ファウスト論」（1845年）において，個人と社会，個人の幸福と社会の発展との関係の問題について，いかなる方向に解決を求め，いかなる場面に「目標」を設定したかを見た。それはあくまでも人間的な現実の内部での解決の方向であり，そのために“余計者”主人公の内的分裂の描出の基礎となりうるものであった。時にいわれるように，詩小説「パラーシャ」には，プーシキンからのさまざまな借用，詩句の冗長，小説的色彩の稀薄，過度なユーモアが感じられはする。しかし，主人公ヴィクトルの心理的分裂を社会的現実のうちで表現してゆこうとする思想的方向の端緒もまたそこには読みとられるように思われる。これは，前にも示しておいたように，ベリンスキーの教えるところのものであった。

トゥルゲーネフがそのベルリン留学を終えてロシアに帰国したとき（1841年），ベリンス

84) Тургенев, Соч., XIV, 12.

85) 例えば，小詩には，「夕べ」（『同時代人』1838年），「メヂチのヴィーナスに寄せて」（『同時代人』1838年），「バラード」（『祖国雑記』1841年），「老地主」（『祖国雑記』1841年），「掠奪」（『祖国雑記』1842年）等がある。これらの詩は，今日一般に，独創性に欠け作家の発展に大きな意義をもたないとされているが，フリーボーンによれば，「彼の詩はすべて著しい詩才と明らかに抒情的な傾向を示している。彼はその主題のいくつかをシェクスピアとゲーテ，特にゲーテから得ているが，これらの詩は，その主題のロマンティクな香りにもかかわらず，主として明快で古典的な形式を表わしており，この点プーシキンの模範に多くのものを負っている」。R. Freeborn, *op. cit.*, p. 24.

86) Д., 3.

キーはすでにフォイエルバッハの思想に近づき，社会主義がすべてであり，単に国民文学だけでなく傾向文学の提唱者でもあり，更にいまや分化したスラヴ派に対する西欧派の有力な批評家の一人になっていた。これは周知のところであろう。しかし当時のトゥルゲーネフにとってのベリンスキーは，まずもって一個の「善人」(ein guter Man) であったように思われる。[87] のちの『文学的回想』によれば，「ベリンスキーは否定者であるとともに理想主義者でもあった。彼は理想の名において否定したのである。その理想は，科学，進歩，人道主義，文明などと，またついには西欧というふうに呼ばれたし，またいまも呼ばれているが，きわめて限定された同質の特性をもつものであった。思想は穏健でも悪意のある人々は，革命ということばさえ使っている。しかし問題は，名称にあるのではなく，多言の必要がないほど明白で疑いのない，その本質にある。そこでは誤解は考えられない。ベリンスキーはこの理想に全身を捧げた。彼は己れの全共感をもって，己れの全行為をもって，その敵のいわゆる『西欧派』の陣営に身を投じた。彼が西欧派になったのは，単に西欧の科学，西欧の芸術，西欧の社会機構の優越を認めたからではなくて，ロシア特有の力を発達させ，ロシアが西欧のあらゆる所産を感得する必要のあることを深く確信していたからである。彼は，当時スラヴ派が自分たちの最も優秀な雷神を投げつけていた，そのピョートル大帝がわれわれに示した道を進む以外にわれわれに救いはないと信じていた。西欧生活の結果を摂取し，自然，歴史，気候の特殊性に応じて，それらをわれわれの生活に適用する。――とはいえ，自由に，批判的にそれらに対するのである。――このようにしてわれわれは，彼の概念によれば，普通考えられているよりも彼がはるかに高く評価していた独自性をついに獲得することができたのである。ベリンスキーは根っからのロシア人であった。愛国者でさえあった。――勿論，M. H. ザゴスキンと軌を一にはしていない。祖国の福祉，その偉大さ，その名誉は彼の心に深い強い反響を呼び起こした。しかり，ベリンスキーはロシアを愛した。しかし彼はまた啓蒙と自由を熱烈に愛した。これらの，彼にとっては最高の関心事を一つに結合すること――ここに彼の行為のすべての意義があり，彼が志向したものは正にこれであった。」[88] このようにして，トゥルゲーネフは「善人」としてのベリンスキーの教えに従い，彼がそれに従った限りでベリンスキー

87) それ以前，まだペテルブルク大学在学中にトゥルゲーネフとその仲間たちにとって，ベリンスキーがいかなる存在であったかを如実に示すものとして以下の個所を挙げておく。См. Тургенев, Соч., XIV, 23.「1836年にベネディクトフの詩集が，扉には欠かせない唐草模様のついた……小型な本になって現われ，全社会，全文学者，批評家たち，全青年を魅了しつくし……と或る朝，学友が私のところに立ち寄って，ベランジェ菓子店にベリンスキーの論文の載った『テレスコープ』の号が出ているが，その論文で，あの『あら探し屋』がわれわれみんなの偶像ベネディクトフに向かってあえて手を振りかざしている，と憤激して語った。私はすぐさまベランジェに出かけていって，その論文を始めから終りまで全部読み通した。――そしていうまでもなく，私も同様憤激に燃えたった。しかし――不思議なことに！――読んでいるときも，また読み終ったあとも，われながら驚き，またいまいましく思ったことには，自分のなかの何ものかが無意識に『あら探し屋』に同意し，彼の結論を正当なもの，……反駁しがたいものと認めたのだった。私は，正に思いもかけなかったこの印象を恥じ入り，自分のなかのこの内部の声をかき消そうと努め，友人たちのサークルのなかでベリンスキー自身に対し，また彼の論文に対してますます激烈な批評を加えた……が，心の奥底では何ものかが彼は正しい，と私に囁き続けるのだった……，数日たって――私はもはやベネディクトフを読まなくなっていた」。

88) Тургенев, Соч., XIV 42-43.

はまたトゥルゲーネフの才能の意義を評価するという関係が成り立ったのであった。

「パラーシャ」公表（1843年4月）後スパースコエで猟を楽しんでいたトゥルゲーネフは，『祖国雑記』（同年5月）に掲載されたベリンスキーの過賞ともいえるほどの批評に接して「焔の洗礼」に感激し，同年の夏ペテルブルクに出てベリンスキーを訪問した。[89]

〔11〕 この処方箋によって書かれたトゥルゲーネフ氏の最初のポエマ「パラーシャ」を，ベリンスキーは次のようなことばで迎えた。すなわち，「トゥルゲーネフ氏の詩に表わされているのは，異常な詩的才能，正しい観察力，ロシア生活の奥底からくみ上げられた深い思想，かくも豊かな感情を秘めている優美で繊細なアイロニーである。——すべてこのことは，作者が創作の天分を有しているばかりか，わが時代の悲哀と問題とのすべてをおのが胸に秘めている，わが時代の息子であることを示している。われわれは独創性については言わない（とベリンスキーは続けている）。独創性は才能と同じである。少なくとも独創性なしには才能は存在しない。多くの者は，この詩の中にプーシキンやレールモントフの模倣のあとを見いだすであろう。……[90] トゥルゲーネフ氏の詩には，かくも多くの生活とポエジーがあり，彼の見解にはかくも多くの真実と正しさがある。模倣について考えることは，ここでは全くナンセンスである。ポエマ全体は（とベリンスキーは断言した），思想，調子，色彩のかくもきびしい統一に貫かれており，それは，作者のなかの創造的な才能を示すだけでなく，自己の対象をもつことのできる才能の成熟と力強さをも示すほどに一貫させられている」。[91] このようなことばは，いうまでもなく，その批評家の示す結論に導いた。すなわち，「このポエマに関しては，わが国の詩情とわが社会が最近どのような進歩をなしたかを述べないわけにはいかない。このことを納得するためには，プーシキンの『ジプシー』以前に現われたポエマを思い出せばよい……現代の詩情をとらえたアイロニーとユーモアは，何よりもよく，詩情の大きな進歩を証明している。なぜなら，アイロニーとユーモアの不在は，常に文学の子供の状態を示すものだからである。」[92]

トゥルゲーネフ氏の才能は，1843年にこのような批評で迎えられた。[93]

このような好評に迎えられて，トゥルゲーネフは，「ベリンスキーの許を訪ねた。……秋のくるまで殆ど毎日ベリンスキーを訪ねた。私は彼を心から敬愛した。彼は私に好意をもっていた。」[94] 前に見たように，ベリンスキーに対するトゥルゲーネフの「敬愛」は「善

89) См. Тургенев, Соч., XIV, 24.「ポエマ『パラーシャ』が出たとき，私は，ペテルブルクから村へ発ったその日にベリンスキーのところに立ち寄った。（私は彼の住所を知っていたが，まだ訪ねたことはなく，ただ知人の家で彼と前後二度会っただけだった。）そして，名前を名のらずに，家人に一冊の本を預けて立ち去った。私は村で二ヶ月ほど過ごし，『祖国雑記』の5月号を受け取り，そのうちで私の詩についてのベリンスキーの長い論文を読んだ。その論文はあまりにも好意的でありすぎ，あまりにも熱烈にほめすぎており，私は喜びよりもむしろ困惑を覚えたのを記憶している」。

90) このドゥドゥィシキンによる引用文中の省略部分は次のとおりである。「これは驚くべきことではない。なぜなら文学的現象の生きた歴史的連続は，つねに冷淡な，魂の抜けた模倣と混り合うからである。しかしながら思索する人間は，祖国の文学の偉大な巨匠たちの必然的影響を受けて，彼らによって文学や社会に確立されたものを自分の作品のなかに表現することと，奴隷的に模倣することとが全く別のことであることを理解している。前者は，生き生きと発達する才能の証拠であり，後者は無能の証拠である。作家の詩句や方法をまねることはできる，だがその精神や本性をまねることはできない。なぜなら，長い間，他人のことば，他人の方法で生きることは可能であるが，自分自身の精神や自分自身の本性は，それがいかなるものであろうと，偉大であろうと，矮小であろうと，それらを捨てることはできないからである」。（Белинский, VII, 79）

91) Белинский, VII, 78–79.

92) Белинский, VII, 79.

93) Д., 3–4.

94) Тургенев, Соч., XIV, 24.

人」ベリンスキーに対するものであり，一方トゥルゲーネフに対するベリンスキーの「好意」的態度は，このやっと25才になったばかりの青年詩人のうちに「創作の天分」だけでなく「時代の息子」が見られたからに他ならない。プーシキンやレールモントフの詩句の模倣にもかかわらず，「自己の対象をもつことのできる才能の成熟と力強さ」が見られたからに他ならない。ベリンスキーにおけるこの批評の基準そのものは，のちにトゥルゲーネフに対する評価の仕方が多少更められた際にも，変わらなかったところのものである。

〔12〕この評価を偶然的なものと見てはならない。それは全く論理的であり，少なくとも一面的であるほどまでに論理的である。その評価は，トゥルゲーネフ氏がその作家活動の初めに生活に対して抱いていた見解でもあったまさに同じ確信の深みから，出ている。これあるがために，われわれはこの評価を引用したのである。われわれは，この有能な批評家がトゥルゲーネフ氏の詩句および詩作品について，かくもひどい間違いを犯しえたのはどうしてか，と長い間考えた。そして再び，すべてをカバーする同一の理論で，このことを説明した。かくも大声で賞賛されては，生涯詩を書かないわけにはいかなかったように思われた。そしてトゥルゲーネフ氏は更に二つのポエマを書いた。こののち，彼は詩を書くのを止めた——これは非常によいことだったように思われる。

批評家と詩人は，互いに買収されていて，実際にはありもしなかったものを見ていたのである。周知のように，「パラーシャ」の主人公は結婚後，「月並みさ」におちこんでおり，この「月並みさ」は一生続いた。すべての夢，すべての志向は捨て去られた。ある時両肩にガウンが掛けられ——もはや一巻の終りであった。人間には何の仕事もなければ，地上に何の活動もない。彼はもはや，詩の中で賞讃されたような詩的な人間ではなくなり，『死せる魂』に描かれたような人々の範囲に移った。その後，トゥルゲーネフ氏の主人公は，同様の運命から免れるために，すべてどこかに逃げ出すか，あるいはヨーロッパ旅行に出かけてしまっている。彼らは社会で“余計”になっている。トゥルゲーネフ氏のすべての活動の発端はここにあり，ベリンスキーの批評の起点もここにある。裁判官と被告はここでは同一の人格である。[95]

ここでいう「確信」とは，さきに繰り返し述べたように，個人的幸福の理想と社会的変化の発展，すなわち個人の自己意識と社会意識との分裂を人間的現実の内部で解決しようとする志向に他ならない。このような志向は，40年頃までにベリンスキーにおいて確立した思想の直接間接の影響のもとで，「ステーノ」から「パラーシャ」に至る過程でトゥルゲーネフのうちに生まれてきたものであった。したがって，その「確信」が，トゥルゲーネフにおけるよりもいっそうはっきりした形で，ベリンスキーのものでもあったことは当然である。あえていうまでもなく——ドゥドゥィシキンのいうように——ベリンスキーの前掲の批評もトゥルゲーネフと「同じ確信の深みから出ており」，ベリンスキーの「批評の起点」はトゥルゲーネフの「活動の発端」と同じものである。そして，もし一般に文学の原理を同じくする作家と批評家とを，「買収」しあう者，裁く者と裁かれる者が「同一人格」である者ということができるとするならば，トゥルゲーネフとベリンスキーとのここでの場合は，まさにその一例であるといえよう。しかし，問題は，ドゥドゥィシキンのいうように，その一つの文学原理を共有する両人がともに「ひどい間違い」を犯しているか否かという点にある。ドゥドゥィシキンは，彼ら両人に共有されている「確信」，志向を

95) Д., 4. バニェツキーによれば，「チェルヌィシェフスキーは，ベリンスキーの『文学観』に対するドゥドゥィシキンの『嘲笑』を軽蔑をもって批評し，ロシア文学史の問題におけるドゥドゥィシキンの粗雑な無学を指摘した」(См. Бонецкий, Указ. статья, стр. 31.)。

間違っているというのであろうか。それとも，根本的「確信」を共有するがゆえに，詩作品に対する批評が甘くなりすぎているというのであろうか。答は，その両方であるように思われる。

実はトゥルゲーネフは，その後ポエマを二つではなく三つ（「会話」，「アンドレイ」，「地主」[96]）書いている。しかし，ここで注意すべきは，むしろ，のちにベリンスキー自身がそれらの詩作品に対して辛い批評を下していること，「パラーシャ」に対するさきの激賞を更めていることであろう。すなわち，トゥルゲーネフの『回想』には次のような事実が記されている。「特に私に関して言うならば，彼は，私の文学活動を迎えた最初の歓迎以後は，きわめて急激に――しかも全く正当にも――私の活動に対して冷淡になった，と言わなければならない。当時私が没頭していた小詩やポエマの作品において彼は私を鼓舞することができなかった。しかも，私はこのような習作をつづける少しの必要もないことをまもなく自ら推察し――そして全く文学を捨て去る堅い決心を持ち始めた。」[97]「1847年のロシア文学観」においては，トゥルゲーネフの初期の詩作品に対するベリンスキーのかなりまとまった次のような批評が見られる。すなわち，「トゥルゲーネフ氏は自分の文学的活動を抒情的な詩をもって始めた。彼のこまかい詩のうちには，三，四のきわめて悪くない小曲がある。例えば『老地主』，『バラード』，『フェーヂャ』，『よくあるような人間』のごときである。しかしこれらの小曲が成功したのは，それらのなかに全く抒情精神がなかったからか，もしくはそれらのなかで主要なものが抒情精神でなく，ロシア生活への暗示であったからである。そしてトゥルゲーネフ氏の元来の抒情的な詩は独立的な抒情詩的才能のだんぜんたる欠如を示している。彼は数個の叙事詩を書いた。それらのうち最初のもの，『パラーシャ』はその出現の際に雄勁な詩句，快活な皮肉，ロシアの自然の正確な情景のゆえに，そして主要なことは，――詳細にわたる地主の生態の手際よい生理学的記録のゆえに，公衆によって認められた。しかし叙事詩の確固たる成功を妨げたのは，作者がそれを書く際に生理学的記録については全く考えず，この種の詩への独立的才能が彼のところにないような意味における叙事詩について配慮したことである。そのためにそのなかにあるすべてのよきものはなんだか偶然的に，はからずもそのひらめきを見せたわけである。その後，彼は叙事詩『会話』を書いた，――この作における詩句はひびきがよくて強く，多くの感情，知力，思想がある。しかしこの思想は他人のもの，借用されたものであったから，はじめて読むとき叙事詩は気に入りさえもしえたが，それを二度読むこ

96）もっとも，この作品「地主」は，形はポエマではあるが，すでにベリンスキーによって「地主の生態の生理学的記録」として「他の追随をゆるさない」ものであると賞讃された。ドゥドゥィンキンがこの作品をポエマから除くとき，このベリンスキーの見方に従っているのかも知れない。См. Белинский, IX, 567; X, 345.

97）Тургенев, Соч., XIV, 52. 参考のために，これに直接つづく個所を補足するならば，以下のとおりである。「ただ『同時代人』1月号の雑録の部分を埋めるべき原稿をもたなかった И. И. パナーエフの願いによって，私は『ホーリとカリースィチ』と題する短篇を彼に送った。（『猟人日記』なる語は読者の寛容を誘う目的をもって，当のパナーエフによって案出され，付加されたものである。）この短篇の成功は私に別のものを書き上げようという意欲をそそり立てた。そして私は文学に復帰したのである。しかし読者は，上述のベリンスキーの書簡から，彼はそれ以後私の散文作品に満足の意を示しはしたが，しかし特別の希望を私にかけなかったことを読みとられることであろう。」(Тургенев, Соч., XIV, 52.)。

とはもうしたくないのである。トゥルゲーネフ氏の第3の叙事詩『アンドレイ』には多くのよきものがある，なぜならロシアの生態の多くの正確な記録があるからである。しかし全体としては叙事詩はまたしても成功しなかった，なぜならこれは，それを描出することが作者の才能のうちに入っていないところの愛の物語だからである。叙事詩の女主人公の，主人公への手紙は長くて冗漫であり，そのなかにはパトスよりも感傷性の方が多い。一般にトゥルゲーネフ氏のこれらの試みのなかには才能が見えているが，しかしなんだか不決断な，不定的なそれである」。[98] そのときにはすでに短篇「ホーリとカリーヌィチ」をはじめ『猟人日記』の7篇が『同時代人』誌に掲載されていた。そしてベリンスキーは，一般論として，各作家がそれぞれ自分の才能に適した「自分の道」を探し当てることの困難さを認めた上で，トゥルゲーネフがようやくその頃になって彼特有の才能の発揮されるジャンルとして「生理学的記録」に行き当ったとしている。すなわち，彼によれば，「トゥルゲーネフ氏の才能はルガンスキー（ダーリ氏）の才能との多くの類似点をもっている。この両者の本当の種目はロシアの生態およびロシアの人々の種々な方面の生理学的記録小説である」。[99] このように見てくると，さきに「トゥルゲーネフ氏が詩を書くのを止めたのは非常によいことだった」というドゥドゥィシキンの感想は，あながちベリンスキーの見解と相反するものではないことが分かる。しかもドゥドゥィシキン自身そのことを知らなかったわけではないと推定される。[100]

しかしながら，他方，このようなベリンスキーの評価の変更にもかかわらず，その変化をふくめて彼の批評の基礎にあるものが一貫してさきの根本的「確信」，志向――個人の心理的分裂を個人と社会との現実的関係の内部で解決しようとする決意――であったことを忘れてはならない。これは『猟人日記』の数篇に関するベリンスキーの批評を見れば明らかであろう。[101] トゥルゲーネフ自身も――バウマンによれば[102]――「常に現実に足をつけるべきだ」というベリンスキーの批評の基礎を快よく受け入れたのだった。したがって，中心的問題は，単に詩作品に限らず文学，文学批評の全般にわたって，ベリンスキーとトゥルゲーネフとの両者に共有されていた根本的な「確信」，志向に対してドゥドゥィシキンの投げかけた疑問にある。

〔13〕ベリンスキーは「パラーシャ」について続けている。すなわち，「結婚は男性の生涯における決定

98) Белинский, X, 344-345. 除村訳，前掲書，pp. 139-140 参照。

99) Белинский, X, 344. 除村訳，前掲書，p. 139.

100) ここで参考のために，1847年当時，ドゥドゥィシキンの文学批評に対してベリンスキーがかなり高い評価を与えていたことが想起されるべきであろう。例えば，「ドゥドゥィシキン氏の諸論文においては問題の知識が見えている。彼はりっぱに発達の歴史的研究を利用し，それによってあたえられた時代の文学作品を説明している。」「ドゥドゥィシキン氏はこれらの欠点をさけることができた。明らかに，彼はすでに準備された内容を頭のなかにもって事にとりかかり，自己の思想を完全につかんでおり，思想が調子にのりすぎたり，または彼をあるいは一方の，あるいは他方の側につれ去ったりすることを許さない。そしていつでも思想を与えられた対象のうえに保っている，それゆえ初めから始めて，終わりに終わり，適度に語り，したがって，それについて語っている対象を完全に読者に知らしめるのである。」(Белинский, X, 355. 除村訳，前掲書，pp. 159, 160 参照)。

101) См. Белинский, X, 345-346.

102) Herbert E. Bowman, *Vissarion Belinski (1811-1848). A Study in the Origins of Social Criticism in Russia*, Cambridge, Massachusetts, Harvard Univ. Press, 1954, p. 197.

的な時期であり，女性の生涯においては更にいっそう決定的である。両性にとって，結婚はポエジーの墓場であり，散文のゆりかごである。『パラーシャ』の作者は，人間すべての性格を，とりわけ馥郁たるポエジーに対しては脅威的で破滅的な，全女性の性格を，自己満足ということで，見事に特徴づけた。人間は利口者と馬鹿者にだけ分かれるのではない。両方とも等しく稀である。両者の間には多くの種類の月並みな人間が位置を占めている。これらの人間は大部分利口でもなく，馬鹿でもない。時に両者の間には知恵がないわけではないし能力もないわけではない人間がいる。しかしいずれの場合にも，彼らの主要な質は自己満足である。これらの諸氏は，後悔とは何なのか，理想への志向，理想に到達しえないことから生じる憂愁とは何なのかを知らず，不幸ではないのに感じられる悲哀，仕事がうまくいき健康に恵まれているのに感じられる苦しみとは何なのか，を知らない。ある女性の本性がいかに深かろうと，また彼女がいかに才智に恵まれていようと，もしもこのような諸氏の誰かが彼女の夫となるならば，彼女には二つの避けがたい道しか残されていない。すなわち，徐々にしおれてしまうか，あるいは，あるがままの生活に順応するか，である……。」[103]

パラーシャの夫と彼女自身が月並みなものになっている「パラーシャ」が出たとき，ベリンスキーは以上のように考えていた。[104]

さきに繰り返し述べたトゥルゲーネフの特有の対象，すなわち個人の幸福と社会の発展との間の分裂，および個々人におけるその分裂の心理的な現われ――ベリンスキーのいわゆる「生理学的記録」――とは，ここでいう健康，社会的幸福のうちに，それにもかかわらず胸底に感じられてやまない後悔，憂愁，悲哀のことである。そして更に，このような生きることの悔い，憂い，悲しみを忘れた「自己満足」の生活こそが，ドゥドゥィシキンのさきの分析によれば，トゥルゲーネフがゴーゴリから受け継いだところのロシア的「状況」――『死せる魂』等において描かれたロシアの町や村の生活――である。[105]

このような「状況」――月並みさに甘んじた暮らし――と，そのまっただなかで時に感じられる憂い，更には悲劇的な破滅の原因としての生活の「理想」との対立。以下でドゥドゥィシキンは，この対立をまず，トゥルゲーネフの初期作品を順次追いながら「理想」の側面から跡づけてゆく。しかし，ドゥドゥィシキンの論行において特徴的なのは，――前掲文中の利口でもなく馬鹿でもない――ロシア人の多数者の「状況」への「理想」の適応に論が向かっていることである。

〔14〕トゥルゲーネフ氏自身がその著作集『中篇』から除いた作品について詳述することは，許されるであろう。ところで，第1に，すでにわれわれは次のことを述べた。すなわち，トゥルゲーネフ氏のポエマと初期の中篇との間の差異は，ポエマを省略してもかまわないほど大きなものではないことである。第2に，作家の活動の端緒を特にはっきりと規定することは常に必要である。これは，作家がどのくらい経過したか，どのくらい多くの前進をなしたかをのちになって知るためである。このことなしには批評も成り立たない。[106]

---

103) Белинский, VII, 72-73.

104) Д., 4-5.

105) かようなロシア的生活に対してトゥルゲーネフがいかなる観点からアプローチしたかは，ドゥドゥィシキンの本論文の第二部において主題的に論じられる。本文中の前掲引用文につづいて，次のように述べられている。「自己満足を，われわれが現在ひきこまれているところの，生活におけるすべての破滅的なものの源泉として追跡していることに，ここでは特に注意を向けることが必要である……しかしこれについては後に述べよう」。Д., 5.

106) Д., 5.

ドゥドゥィシキンは，トゥルゲーネフの『中・短篇集』を批評するにあたって，まず生活に対する理想の側面から眺め，その理想が問題の12年間にいかに変遷，前進したかを明らかにすることをもって批評の手順とする。したがって，彼の検討は，トゥルゲーネフが文筆活動を始めた当時，一般にその前提となっていた理想はいかなるものであったか，という問いから出発する。

〔15〕したがって，トゥルゲーネフ氏の端緒の理想の解明に立ち帰ろう。

当時人々は，労働，生活，恋愛，活動において月並みさと自己満足を何よりも恐れており，それらからあてもなく逃げ出していた。彼らは，月並みさの生じうる可能性が見られるところでは，どこでもその地位，活動をあらゆる方法で訴追したものだった。また逆に彼らは，自分自身と他人とに対して決して不満を見いださず――たえず賛美したのだった……[107] ある人は常に正しく，他の人は永遠に罪があった。ある人は何もせず，他の人は何をしようと，すべて月並みになった。……[108] "余計"者たちはこの高貴な人間を軽蔑し，高貴な人間は彼らを絶えず許して，自分の道を歩むのであった。社会に対するこのような見解は，長くは維持されなかった。何ものとも結びつかずに大気中を飛べる可能性をもっていた人々は，遂には，地上で働らく人間の面前で弁明せねばならなかった……。[109]

しかし当時は敵対していなかった。すべての勤労するもの，働らくものは月並みであった。しかし，もしもそれらの人々が月並みならば，もはや言いわけは，何にも誰にも不要であった。[110]

当時，生活に対する理想の関係は，月並みな生活に埋もれそれに甘んじていた人々と，そのような生活を快しとせずにそれから逃れ天上に舞い上って他を見下していた人々との対立として現われていた。社会は月並みな労働以外の何ものでもなく，個人は社会から離れてのみ成り立つものであった。その意味では，社会への埋没者と社会からの離脱者との間にはなお人間の内的な関係はなく，そのいずれの側にもまだ真の意味での心理的な矛盾は表われていなかったといってよい。一方には埋没する社会への賛美があり，他方には飛翔する天上の謳歌があった。互いに他に対する抗弁も弁明も不必要であった。ドゥドゥィシキンは，このような時期の文学における理想を特徴的に表わしているものとして，ベリンスキーの或る批評をとりあげる。それは，「『バラトゥインスキー詩集，たそがれ』論」[111]（1842年）である。

〔16〕当時文学においても社会においても等しく有意義であった二つの作品を読んでベリンスキーが抱いた考えは，この点で特に特徴的である。社会から同じく尊敬を受けていた，バラトゥインスキー

107）省略部分は次のとおり（以下同じ）。〔実は，自分に不満な者は，不満でありながら何をなすべきかを知らず，満足している者は何に不満を抱くべきかを知らなかっただけであるのに〕。

108）〔それゆえ，もし文学によって社会を判断するとすれば，こう考えることができよう。すなわち，毎日，大声で空言をいうことなしに働らき，ひとに知られもせず，働らいたからとて同情あることばをかけられなくても平気で，目的に向かって忍耐強く進むような，そのような高貴な人間は，われわれのもとには一人もいない，と〕。

109）〔これらの「イデアリストたち」にとっては，船に乗って最初の順風で走り去るのは結構なことだった。しかし，彼があえて高慢にも見下した人々にとっては，どうであっただろうか。これらの人々は，このような不自然な文学的傾向に対して，のちには反旗をひるがえした〕。

110）Д., 5.

111）Стихотворения Е. Баратынского — Сумерки. Сочинение Евгения Баратынского. Москва, 1842.　Стихотворения Евгения Баратынского. две части. Москва, 1835. : — Белинский, VI, 456–488. これは初め，『祖国雑記』1842年 No. 12 に無署名で掲載された。

（詩の新らしい版の）と，ペチョーリンの作者レールモントフとが，同じ時期に批評家の審判の前に現われた。バラトゥインスキーにはポエマがあり，その中で一人の若い士官が無為のために一人の娘を誘惑し，そして去ってゆく。レールモントフには或る短篇があり，そこでは，もう一人の士官がチェルケス娘を誘惑し，そして同じように彼女を捨てる。内容は，語るべきことが何もないほど同じであり，それほどに貧しい。なお前者のポエマの名前をあげなければならないが，これは「エダ」であり，第2の方は，「ベーラ」である。もし詩句と外的な仕上げのことを度外視するならば，そのポエマとその短篇との思想の点では，両方の詩人を同様に賞賛あるいは非難しなければならないほど，それほどに二つの作品には驚くべき内的な類似がある。この二つの作品は，いかなる批評を受けたか。……112)

ベリンスキーの批評のうちに当時の文学における理想を明らかにするためには，その批評『たそがれ』論の内容を振りかえって見なければならない。

〔17〕ベリンスキーが「ベーラ」と「エダ」について述べたことは以下のとおりである。113)「あるフィンランドの宿営で，ロシアの若い士官が自分の主人の娘であるフィンランド娘エダを誘惑する。彼女は，人の好い，愛情深い，おとなしい，だが生まれながらに何かある特別な点ですぐれているわけではない女性である。誘惑者に捨てられたエダは悲しみのあまりに死ぬ。これが美しい詩句で書かれ，魂と感情にみちたポエマ『エダ』の話の内容である。芸術の領域においてこのポエマのもつこの上ないつまらなさを示すためには，このポエマについての上述の数行ですでに充分である。このようなポエマは，ドラマと同様，その内容のために悲劇的な衝突を必要とする。乱暴者が娘を誘惑しそして捨てたということのうちで，何が悲劇的なもの（すなわち，詩的に悲劇的なもの）であろうか。かような人間の性格や境遇は読者に共感を呼び起こすことはありえない。例えばレールモントフの中篇『ベーラ』においても話の内容はほとんど同様である。しかし何と違うことか！　ペチョーリンは，内的および外的な無為に運命づけられた自分の魂の恐ろしい力によって喰い尽くされた人間である。チェルケス娘の美しさは彼に感動を与え，彼女をとりこにできぬことの難しさは彼のもちまえのエネルギーを刺激し，期待する彼の幸福の魅惑を強める。ベーラの冷たさは，彼の情熱をさめさせることなく，かえっていっそう燃え上がらせる。しかし彼は，素朴な，野生的な自然娘に対するその本来的な愛に初めて有頂天になったとき，持続的な感情のためには本来性が乏しく，愛における幸福のためには愛が貧しいことを感じた。そして，野生的ではあるが愛らしい女性の破滅についての想念が，彼を苦しめ始めた。愛においてこの女性は，その自然のままの単純さのゆえに愛以外の何ものをも要求したり与えたりすることができなかった。ベーラの悲劇的な死は，ペチョーリンの境涯を和らげずに，かえってある新しい力をもって以前の炎を再び燃え上がらせ，彼をおそろしくゆさぶる。そして，彼の粗暴な哄笑に心が震えあがるのは，マクシム・マクシームィチだけではない。だがベーラの死後，なぜ彼が長い間健康がすぐれず全身やせ衰え，目の前で彼女の話をされるのを好まなかったかが，はっきりしてくる……この人物は女たらしではなく，ヴォードヴィルのドン・ジュアンでもない。諸君は彼を非難せずに彼と共に彼のために苦しむ。『世に生まれたわれわれは，いかに悲しいことか！』と胸中に語りながら。或る人々にとっては，感じないこと，あらゆる精神的活動の外にあること，それよりは死んだ方がましである。しかし生きることは苦しむことよりももっと重要なことである。そしてここに悲劇的な衝突が，偉大な詩人のポエマやドラマに値するところの，しりぞけがたい運命の思想として現われている……」。114)

112)〔まさにこのような衝突のうちに，批評の傾向と批評のいつわらぬ思想が，何よりもはっきりと表われている。そこで批評家がいつもながら見ているのは，実際にあるところのものではなくて，批評家が，あるようにと欲したところのものである〕。Д., 5-6.

113) Белинский, VI, 481-482.

114) Д., 6-7.

1840年4月，ある決闘事件で収監中のレールモントフを衛戍監獄に訪れたベリンスキーの，その前後のレールモントフ評――とりわけ主人公ペチョーリンの性格分析――については多言を要さないであろう。[115] 彼の批評の要点は，いうなれば「社会的疾病の時代に生まれてきた人は痛ましい。社会は年をもって生きているのではなくて――世紀をもって生きている。しかるに，人間には一瞬の生命しか与えられない。社会は健康になるであろう。しかし，精神の最も高貴な容器であり，社会の病いの危機を身をもって表現している人間は，いつまでも人生の破壊的要素のなかにとりのこされうる」[116] ということ，そして「詩的作品に表現される現代の社会的問題」はすべてとりもなおさず詩人の「苦悩のための号泣」[117]，「理性的な狂気」[118] であるということに尽きる。ベリンスキーにとっては，このような内的分裂として表わされる思想性こそがペチョーリンをグルシニツキー――「年をとると温厚な地主になるか，のんだくれになる」人物――から区別するものであった。彼における生きることの悲劇的運命とは，このことに他ならない。

それに対して，ベリンスキーはまた，かねてからバラトゥインスキーの詩才の質を分析し，それを高く評価しながらも，[119] ポエマ「エダ」を彼の失敗作の一つに数えていたようである。ベリンスキーにとって「エダ」にでてくる主人公「ロシアの若い士官」には生きることの悲劇的運命が感じられない。悲劇とは，彼にとっては，ただ，月並みでない感情，高調子の情熱，あわれみを誘う受難ぶりにもったいをつけて地方女の感傷を誘い，読む者に涙を求めるような心理的戯れとは異なるからである。「文学的空想」(1834年)においてベリンスキーは次のように言っている。「バラトゥインスキー氏はプーシキンと同列に置かれていた。彼らの名前は，常に切り離されることがなく，かつてこの詩人たちの二つの作品が一冊の本で出されさえした。プーシキンについて語ったとき，私は，いまや初めて反動がすでに終り，諸党派の熱がさめたがゆえに，プーシキンが正当な評価を受けて

115) その訪問のときのことについてベリンスキーは「私はついこの間収監されているレールモントフを訪れ，はじめて彼と心の底から話し合った。何という深刻で力づよい心であろう！　なんという深くて純粋に直接的な美的趣味をもっていることだろう！　これはイワン大帝以来のロシア詩人となるであろう！」と述べている。(Белинский, XI, 508-509.) ベリンスキーは『ロシア廃兵への文学付録，第18号，1838年』において初めて無名のレールモントフに言及して以来，その翌年には「ベーラ」評を，更にその翌年にはやや大部の「現代の英雄論」を発表している。

116) Белинский, IV, 519-520.

117) Белинский, IV, 267

118) Белинский, IV, 501

119)「バラトゥインスキーの天分は，二つの領域の境にあった。彼は，本来，芸術家の意味における詩人でも，無味乾燥な思想家でもなくて，もしもこのように表現してよければ，詩で思考したのであった。彼の詩は詩的空論でも，芸術的創造でもなかった。彼の詩においては常に思考が創作の直観性にまさっていた。バラトゥインスキーの詩はほとんどすべて芸術家のファンタジーの理想的な像を実現しようとする志向によって生まれたのではなく，生活の観照が詩人にもたらした悲しい思想を述べる必要によって生まれたものであった。この思想は，あるいは，もっと正確に言うならば，この思考は，バラトゥインスキーの詩においては常に非常に暖かく，非常に誠意に満ちたものである。それは読者の頭に呼びかけるが，しかし心を通して頭に到るのである。バラトゥインスキーの思考には，受難という語のもつ両義における多くの受難がある。すなわちそこには苦しみが聞かれるという意味において，またこの思想は積極的ではなくて純粋に受動的であるという意味において。彼の思考は常に問いであった。この問いに対して，詩人はただ悲哀でもって答えている」。Белинский, VIII, 447。

いることを指摘するのを忘れた。かくて今日，かりそめにもバラトゥインスキーの名をプーシキンの名に並べようとするものはないであろう。そのようなことをしたらそれは前者に対してはひどい揶揄を，後者に対しては無理解を意味することになろう。バラトゥインスキー氏の詩才は，何ら疑いをいれる余地はない。確かに，彼は『宴会』や『エダ』（詩で書かれた『哀れなリーザ』）および『囲い者』の作者ではあるが，しかし彼はまた真実の感情によって滲透されたいくつかのすぐれた悲歌を書いたのであり，『ゲーテの死』はその模範といってよく，また鋭い知恵で際立った，いくつかの書簡がある。かつては功績以上にもち上げられたが，いまでは不当にうとんじられているように思われる。バラトゥインスキー氏はかつては自分が批判的才能の持主であるかのように求めたが，いまや彼自身もはやそのように考えていないように見える。このこともまた更に指摘しておきたい。」[120]

ほぼ以上のようなベリンスキーの見解に対して，ドゥドゥィシキンは，前述のロシア人多数者の「現実」的「状況」を踏まえながら自問自答の形で，次のように批判を展開する。

〔18〕……[121] われわれは問う。一体なぜペチョーリンは正しく，そしてエダの誘惑者には罪があるのか，と。人々は答える。すなわち恐ろしい力が彼を喰い尽くしているがゆえに，ペチョーリンは正しく，エダの誘惑者は恐ろしい力によって喰い尽くされておらず，低級で空っぽであるがゆえに，彼には罪がある，と。しかしメダルを裏返して他の側面から問題を見てみたまえ。社会により多くいるのはどのような人物か。ペチョーリン型か，あるいはバラトゥインスキーが描いたような人物か。そうすればあなた方は，いままでバラトゥインスキーの方が現実により近いことを見いだすであろう。ではもし多くの力に恵まれた人間はいかに振舞うべきか，という問いを自分に課するとしよう。そのとき，より高貴な生まれの人は，凡人や空っぽな女たらしよりも，より崇高ではないのか。崇高な感情をもった人間は何かをなさねばならないのか。ところでもしも彼が何かの行ないをせねばならないとしたら，有益な活動から逸脱するために大きな力に喰い尽くされている人よりも，むしろ，他の崇高ならぬ，より凡庸な性格の人の方を，われわれは許すのではあるまいか。

思うに，これらの問題すべてに対して，現在の時点でどう答えるべきかを，われわれは知らない。しかしその時代にはそれらの問題はすべて明らかに解決されていた。まさにそのときに登場したのが，トゥルゲーネフ氏である。……[122]

ここで，トゥルゲーネフの文筆活動開始の時期に，その思想的前提として，ペチョーリンの評価をめぐって表われていた文学の方位，すなわち現実に対する理想の関係は，またもや——前述のように[123]——「現実」概念の問題に帰着する。「バラトゥインスキーの方

120) Белинский, I, 74.

121) 〔もともとそこにはいかなる悲劇的な衝突もありはしない。チェルケス娘は，エダと同様に，善良で素朴な女性であり，自分を相手に気晴らしをしているペテン師を信じ込んでいる……彼女は，エダがもう一人の士官の犠牲になったのと全く同じく，ペチョーリンの犠牲になっている。彼女においては，エダにおけると同様，ポエマのためのモチーフが足りない。どちらの女性にもできることはただ，何か苦い歌を，一方はフィンランドの歌を，他方はチェルケスの歌を歌うことだけであり，自分の苦い運命を運命に訴えることだけである。……どこにドラマがあるのか。どこに悲劇があるのか。だが，これはすべてどうでもよいことだ。〕

122) 〔他方ある見解の影響のもとに，バラトゥインスキーは生きながら忘れ去られ，レールモントフは賞讃された。前者のポエマは低められ，後者のは賞讃された。バラトゥインスキーの詩も，わが文学における彼の歴史的意義も，詩人を死の宣告から救いはしなかった〕。Д., 7.

123) 本稿175ページ参照。

が現実により近い」とドゥドゥィシキンがいうとき，その「現実」はベリンスキーの「現実」把握[124]とは明らかに異なるからである。チェルヌィシェフスキーとの間の中心的な対決点もまたそこに見いだされるであろう。

V

ほぼ以上のような総論を前提として，いよいよドゥドゥィシキンは，ポエマ「アンドレイ」から『ルーヂン』「ファウスト」にいたるまでの“余計者”主人公の形象の変様過程を作品ごとに追ってゆく。ここまでくれば，ドゥドゥィシキンの本文をできるだけ見通しのよい節区分に整理し，適宜最少限のコメントやノートを付するだけでよいであろう。

ところが，ドゥドゥィシキンの論旨展開は，同時代に比較的彼の近くにいたコルバシンの前述の証言によっても，[125]「きわめて読みにくい」ものであり，また後述のチェルヌィシェフスキーの証言に言われているように，[126]真意を卒直に述べていない廻りくどさがある。それゆえ，以下の見通しのよさにもおのずから限度があるばかりか，紛らわしようのない退屈さを伴わざるをえない。本節は，したがって，資料紹介を主旨とするものであり，本稿通読のためには，むしろとばしていただきたい。

1．ドゥドゥィシキンは，各々の作品中の“余計者”を作家トゥルゲーネフ自身の「理想」的形象としてとらえる観点から，すべてを見る。作中人物，しかもそのひとりの形象と作家の理想とを，このようにただちに同一視することができるものかどうか――これは批評の基本的観点にかかわる問題であろう。[127]

> トゥルゲーネフ氏が文学の舞台に登場したとき，当時理想として何が求められていたかを，諸君はすでに了解しはじめている。残念ながら，当時の理想のこのニュアンスは，1856年までの，すなわち『ルーヂン』をも含めた56年までの彼に残った。しかし，このニュアンスは，絶えず変化し，そしてこれらの変化を通して，ついには作者自身にも明らかになったのだった。トゥルゲーネフ氏は，これらの人物から脱することが，どうしてもできなかった。最初の刺激がかくも強く，最初の信念がかくも強かったのだ！　われわれは，「アンドレイ」(1845年のポエマの主人公）から『ルーヂン』(1856年）にいたるまでの，これらの人物を，トゥルゲーネフ氏の中篇全体を通して追跡し，この抽象的な人物についてのわれわれの意見を述べよう。
>
> すでに見たように，主人公というものは，「喰い尽くすような」力ではないにしても，少なくとも，無言で働く普通の，月並みな一連の人間からは脱け出さねばならぬ輝やかしい能力を持つべきものであった。主人公は，或る条件のもとで，すなわち，偉大な力を自己のうちに閉じこめているという条件がかないさえすれば，不道徳でありえた。その場合には彼にはすべてが許されるのであった。もし彼の

124）岡沢秀虎『ロシア十九世紀文学史』上巻，早稲田大学出版部，昭46，pp. 571-572参照。

125）本稿 p. 171 参照。

126）本稿脚注 221）参照。

127）この問題に関してバニェツキーは次のように指摘している。「肯定的主人公の複雑な問題の解決に際しては，チェルヌィシェフスキーの考えによれば，自分の登場人物に対する作家の関係のあらゆる複雑さを考慮することが必要である。ドゥドゥィシキンは，ルーヂンのそれぞれのことばを『作家自身の考えの表現』とみなして，許容しがたい誤謬をおかした。チェルヌィシェフスキーは，トゥルゲーネフが自分の主人公に対して批判的に近づいたこと，ルーヂンを現代社会の『理想』とみなす根拠のないこと，を推察した」。Бонецкий, Указ. статья, стр. 31.

なかに異常な力がしまい込まれていると考えられない場合には，彼は救いがたい人間である。彼は不評をかうことになる。[128]

2. 通常オネーギン以来の“余計者”形象の変遷には，三つの段階が区別されるが，ドゥドゥィシキンにおいては，それらは同じ“余計者”理想像の——すなわち「喰い尽くすような力」を内に持った人間像の——「ニュアンスの変化」としてとらえられる。それは以下のとおりであるが，もともと“余計者”のもつ余計者性が，このような——「喰い尽くすような力」というような——一定の人間性の本質規定によって可能なものであるかどうか，むしろさまざまな社会的規定の結果としてのさまざまな“余計者”像が出現したのではないか，というところに，これまた批評のもう一つの基本的問題がひそんでいるように思われる。[129] しかし，ドゥドゥィシキンにおいて，オネーギンからルーヂンに至るまでの“余計者”がすべてただ同型のものとされているという，かなり広く行なわれている誤解は，訂正されなければならない。[130]

2₋₁. オネーギン＝アルセーニー型“余計者”——臆病な空想家。

最初の主人公は何もしないでいることができた。この人は何をしようと，いかなる善をもたらそうと，彼は月並みな人間であり，彼のなかには何も理想的なものはない。それゆえ，理想の概念のうちに，いくらかなお空想的なものがあったと判断しうるにすぎない。ところで，バラトゥインスキーの他のポエマ「舞踏会」[131] のうちで，登場人物アルセーニーはこれと同様の理想に比較的近い。そしてそのゆえに，そのポエマは賞賛され，少なくとも無条件的に非難されることはないのである。アルセーニーは，すでにペチョーリンの先駆者であるが，更にオネーギンの臆病さをかねそなえている……。[132]

2₋₂. ペチョーリン型“余計者”——破壊的英雄。

理想は，バラトゥインスキー，プーシキンにあってはまだ破壊的ではなく，エヴゲーニー・オネーギンやアルセーニーのようにまさに時に善良で小さかったが，その理想は，まえに述べたように，レールモントフとともに，ある運命論的な性格のニュアンスを帯びた。これが理想の第2のニュアンスであった。[133]

2₋₃. 新しいタイプの“余計者”——破滅型若年寄り。

レールモントフ以後，この理想はその発展の第3の時期に入った。思想活動に喰い尽くされるが，し

128) Д., 7-8.

129) この問題に関する定説の一つは次のようなものである。すなわち，「ところで，チェルヌィシェフスキーがドゥドゥィシキンと論争していたときには，ニコライの反動の完全な粉砕が必要であった。その犠牲となっていたのが“余計者”たちであり，彼の存在そのものと結びついていたところのプロテストの役割も貴重であった。スラブ主義者にいたるまでロシア・インテリゲンツィアに共通であった敵に対して団結させたものは何か，それは当然理解されていた。しかしクリミヤ戦争につづく時期に進歩的であったものを，革命的状況の時期にも同様に進歩的として認めることはできなかった」。История русской критики, т. II, стр. 76.

130) 本稿 p. 218 参照。

131) ポエマ「舞踏会」(1828年)

132) 〔それにもかかわらず，次のようなアルセーニーの特徴づけは批評家に迎えられるものであった〕。Д., 8. ここでドゥドゥィシキンは批評家ベリンスキーの引用している詩句——アルセーニーの特徴づけの部分——を重ねてひいている。

133) Д., 9.

かし全く無為の人間は，再び，人間のいっそう平安な軌道に入った。このような人間にとっては，地上のどこにも隠れ家はなく，その魂はどこでも休まることがない。そこで彼らは，正面から遭遇する不幸な人々を軽くいなして，抽象的な生活を営む。ペチョーリンやオネーギンが，社会の上流社交界の人間であり，礼節をわきまえていたのに対して，彼らは，メランコリックな，もの悲しい，書斉的なニュアンスを帯びている。[134]

2–3–1. 新しいタイプの“余計者”の典型的な例——ポエマ「会話」の若年寄り青年。

トゥルゲーネフ氏の第2のポエマ「会話」の主人公はこのようなものである。われわれは，わが国の他の詩人たちの多くのそれ以後のポエマおよびトゥルゲーネフ氏自身のそれ以後の諸中篇とこの人物との近縁関係が，この人物のなかにいかに沢山あるかを読者が見ることができるように，作者トゥルゲーネフの詩でもって「会話」の主人公をスケッチしてみよう。ポエマ全体は青年と老人との対話から成り立っている。めいめいが自分の生活の物語りを行なっている……。[135]

2–3–2. ベリンスキーの説明。

これらの詩句にじっくり注意を払わないもののために，ベリンスキーは次のように述べている。[136]「これらの詩句のなかには，この若い修道僧である隠者の性格と状況とのあいだの，この若年寄りである青年の性格と状況とのあいだのへだたりのすべてがある……生活しているものは誰でも，したがって，自分をわが世紀病——喰い尽くすような思想活動のもとでの，感情と意志の鈍感——にとりつかれたと感じているものは誰でも，注意深く，トゥルゲーネフ氏の美しい詩的な『会話』を読むであろう。そしてそれを読み終えて，深く深く思案するであろう。」……[137]

2–3–3. まとめ。

……[138] 疑いもなく，レールモントフの主人公たちはみずからの時代を終えていた。メランコリックな，もの悲しい思想の不安に苦しめられる，よりいっそう人間的な形象が，わが国の文学において支配的なものとなりはじめた。オネーギンの虚無とペチョーリンの嫌悪すべき冷淡さにとって代ったのは，よりいっそう魅惑的な，よりいっそう人間的な質であった。[139]

3. しかし，ドゥドゥィシキンによれば，このようなトゥルゲーネフにおける新しいタイプの若年寄り“余計者”の形象は，ポエマ「会話」において突然すっきりと姿を現わし，それ以後の主人公はすべてこのタイプに属するというわけではない。前述のとおり，トゥルゲーネフの初期においてはなおプーシキン以来の「思い出」が強く，彼自身の文学活動に理想と状況を与えたのは他ならぬレールモントフとゴーゴリであり，更に初期作品のほとんどすべてのものには模倣の跡が著しいことが問題視されさえしていた。ドゥドゥ

---

134) Д., 9.
135) См. Тургенев, Соч., I, 115–119. Д., 9.
136) Белинский, VIII, 599.
137) Д., 11.
138) [そのときから，わが国の文学における新しい理想の特徴が規定され，それはある特有の性格を帯びた。その時期のあるとき，アヴヂェーエフ氏がレールモントフの主人公を想起させることを思いついたとき，すべての人々は彼に攻撃を向けた。] ちなみに，M. B. アヴヂェーエフ（1821–1876）は，『同時代人』および『дело』の協力作家で，いわゆる余計者および貴族社会における婦人の悲劇的状態を描いたその小説『タマーリン』（1852），『暗礁』（1860）にはレールモントフのいちぢるしい模倣が見られる。
139) Д., 11.

ィシキンはそれら初期作品の一つ一つについてその模倣の跡を明らかにしている。これは，前述のように，[140] ベリンスキーによれば，愚かな模倣の追跡であり，また後述のとおり，[141] チェルヌィシェフスキーの反論のポイントの一つでもある。しかし，この問題点は，次の4．との連関において，なお検討されなければならない。

しかし，文学的な回想や愛着はまだ強かった。「三つの肖像画」のなかで，まさにこのトゥルゲーネフ氏は，レールモントフ風の主人公，野獣のような情欲をもった冷血誘惑者，ルチーノフ（1846）をわれわれに描いて見せている。「決闘屋」の人物に対する見解のうちでは，このような主人公がもう不可能になったことがすでに目立っているけれども，また同様にレールモントフの影響が著しいその「決闘屋」において，その性格の仕上げはすべてトゥルゲーネフ氏特有のものではない。「ユダヤ人」――その次の短篇――は，ゴーゴリの中篇とレールモントフの「ベーラ」との間の何か或る中間的なものである……これはすべてトゥルゲーネフ氏特有のものではない。まさに同じく，短篇「ペトゥシコーフ」はあたかも与えられたテーマにそってゴーゴリに依って書かれたものである。またそこでは務めから解放された時間にボタンを磨くことで気晴らしをするシポーニカ[142]が見られるであろう。しかし，これらの人物は，ゴーゴリによって力強く描写されたところの，わが国の生活のすべての日常的状況一般と同じく，単にトゥルゲーネフ氏の中篇においてだけ長く支配的であったわけではない。彼は，それらの人物の影響のもとで，最初のポエマ「パラーシャ」を書き，その後同じ思想を絶えず述べたのだった。『短篇集』の第1巻に掲載された中篇から中篇へと移行するに従って，何よりもよく，いっそう明らかに，当時すべての作家がひきつけられていたところのさまざまの愛着が見られる。[143]

4．初期作品における新しいタイプの“余計者”の形成。

しかし，これらとともに，上述の如く何か新しいもの，われわれがここで検討している作家に個有の特別な理想に，たとえ独自に属するものではないにせよ少なくとも他の誰かよりも彼が長く仕えたところのものに，気づきはじめる。この理想は初めは明らかでない。理想の或る一つの側面が，あるいは他の側面が，初期のポエマや中篇に現われている。しかし，先へ進めば進むほど，そしてついには『ルーヂン』において，その理想はいっそう完全になり，展開されている。「アンドレイ」，「コーロソフ」，「余計者の日記」，「風」，「往復書簡」，いたるところでその人物が無数に散見され，どこにおいても作者自身，その人物をみずからに明らかにするよう努めている。そしてそれゆえに，その人物は作者をして各中篇のうちに強制的に登場するよう仕向けている。[144]

4_{-1}．ポエマ「アンドレイ」――空想的自己犠牲。

中篇に登場するその第1の場合として，ドゥドゥィシキンは，まず“余計者”――アンドレイ――の自己犠牲的な側面から始める。第2，第3の場合が以下の 4_{-2}，4_{-3} である。

かくも自分を犠牲にすることのできる，この青年よりも，より寛大なものがありうるとは思われな

140）本稿 p. 189 参照。
141）本稿 pp. 218-219 参照。
142）ゴーゴリーの短篇集『ヂカーニカ近郷夜話』（1831-32）のうちの一短篇「イワン・フョードロヴィッチ・シポーニカとその叔母」の登場人物。
143）Д., 11-12.
144）続く段落でドゥドゥィシキンは，1857年執筆の時点から見て，次の設問ないし主張を書き入れている。すなわち〔トゥルゲーネフ氏がその人物を清算したかどうか，われわれは知らない。しかし，今やその人物と袂別すべき時期であるといわねばならない。暫時，この理想はすべての人を不安にさせた。そして「イデアリストたち」，「ベリトフたち」が流行した。今日わが国の最良の作家のうちの誰のもとにおいても，われわれは同様の理想に出合うことはない。彼らの時は過ぎ去ったのだ。〕Д., 12.

い。しかし，犠牲を払ったのは実は彼ではないこと，このことのうちに問題がある。このことはそのポエマの結末から理解される。[145]

ドゥドゥィシキンは，恋愛において“余計者”アンドレイの自己犠牲が，実は，次に述べる“余計者”コーロソフの自己主義と同じ結末を相手の女性にひき起こすところに問題を見いだしている。すなわち，

いまやコーロソフから再び「アンドレイ」に戻ろう。彼はどうしたか。惚れ込んだ彼は，外国へ去りそこに永く住んだ。だがしかし，自分のドゥニャーシャを愛し続けた。これは信じがたいほどである。ドゥニャーシャは彼を愛しており，彼に手紙を書いた。彼は戻ったか，否か。コーロソフとヴァーリャと，同じことが彼らにも起こったのである……。[146]

4₋₂. 「アンドレイ・コーロソフ」——破壊的非凡性。

いまや1846年に印刷されたこのポエマののちに，その2年前に印刷された「コーロソフ」を読んでみ給え。そうすれば諸君はトゥルゲーネフ氏がものを書き始めたころその影響下にあったその同じ問題，同じ思想のもつ他の側面に気づくであろう。「コーロソフ」は，なぜヴァーリャを嫌いになったのか，という友人の問いに対して，次のように答えた。すなわち，「なぜか，それは神様がご存知だね。彼女を愛していた間は，僕のすべてが彼女に属していた。僕は将来のことなど考えず，すべてを，自分の生活の全体を彼女と分け合っていた。だがいまや内なるこの情熱は消えてしまった。いいじゃないか。君は僕に，自分を偽って，恋する振りをしろというのか。何のためにだ。彼女への憐憫のためにか。もし彼女がしつけの良い娘なら，彼女自身そんなお慈悲は望むまいし，もしまた僕の……同情などで慰められるのを喜ぶようなら，彼女のなかには悪魔がいるとでもいうのだろうか」。[147] しばらく経って，自分自身ヴァーリャを愛した，コーロソフの友人は，次のような結論に到達した。「ああ，諸君，自分の心は必ずしも彼女によって満たされているのではないと，自覚せざるを得なくなった辛くも偉大な瞬間に，その女と別れてしまう人間，こういう人間は，僕を信じてくれ，こういう人間こそ，退屈のあまり，また弱気から，萎れたセンチメンタルな自分の心の，半ば破れた絃をかなで続けている，あの小心の人々よりも，はるかによく，かつはるかに深く愛の神聖さを理解しているのだ！　われわれはみなコーロソフを非凡な人間と呼んだ」。[148] トゥルゲーネフ氏のつづく主人公たちはみなコーロソフと同じように感じていた。すなわち，自分たちが愛し，また自分たちを愛してくれた婦人たちによって必ずしも心は満たされなかった，と。彼らはみな同じような瞬間に別れた。「そしてもしも（コーロソフの友人は言っている）人生に対する明るい純朴な見解が，またもしも若い人間のなかであらゆる修飾的な要素の欠如が異常と名づけられうるならば，コーロソフは彼に与えられた名前（非凡な人間）に値したのである」。[149] これにもとづいてわれわれは，トゥルゲーネフ氏の中篇の多くの人物を非凡な人物と呼ばなければならない。たとえ彼らが時として非常に美辞麗句を用いる人間であったとしても。[150]

4₋₃. 「決闘屋」その他。——“余計者”の非レールモントフ的性格づけ。

しかし，アンドレイの空想的な自己犠牲が，相手の女性に対して，コーロソフの自己主義と結局は同じ結末をひき起こしたとしても，アンドレイの“余計者”的性格づけがペチョーリンのそれと同じであるとは到底いえない。このような非レールモントフ的性格づけ

145) Д., 13.
146) Д., 14.
147) Тургенев, Соч., V, 26.
148) Тургенев, Соч., V, 35.
149) Тургенев, Соч., V, 35.
150) Д., 14.

は，「余計者の日記」のチェルカトゥーリンにおいて特に著しい。ドゥドゥィシキンは，これら両面をふまえた上で，ついで（4₋₄.）中間的なまとめとして，それら“余計者”の偽瞞性をあばく。

トゥルゲーネフ氏の初期の作品が捧げられているところの，この主要な思想と並んで，上述したように，主要な登場人物の性格の，全くレールモントフ的でない仕上げが行なわれている。すでにコーロソフとアンドレイはこのことを物語っているが，決闘屋とルチーノフ[151]は更に多くこの考えを明らかにしている。なぜなら，作家は，これらのレールモントフ的人物を全く魅力的でない姿に描いているからである。「余計者の日記」のなかの，よそから来た近衛士官は完全にわれわれの考えを確証している。レールモントフは，このような人物を描きながら，ビジョンコフ[152]以外に，更に何らかの余計者を引き出すことが必要だとは見なさなかったであろう。[153]

4₋₄. 中間的なまとめ。「強い感覚の探求者」――いわば，恋を恋する偽瞞的な若年寄り。

このようにして，トゥルゲーネフ氏の中篇においては，作家が追っている理想に関して，二つの異なった側面を常に考慮に入れなければならない。第1は，トゥルゲーネフ氏によって描きだされた人物がみな，かくも恐れているところの「月並みさの永続」，それらの人物がそれに触れれば死んでしまい，舞台からただちに追い出されてしまうところの，生活の肯定的で不可欠な側面。第2は，それらの人物のさまざまな特徴。すなわち，あるものは理想に近く迫っており，あるものは理想から遠くかけ離れているそれらの人物の特徴。実に，彼らのすべてではないが，その大部分は――いまや彼らの本当の呼び名で呼ぼう――強い感覚の探求者は，この人たちは，「喰い尽くすような魂の力をもった」人々とか，あるいは「喰い尽くすような思想活動を行なうが，しかし感情と意志の鈍さをもった」人々とか，かつて呼ばれた人々である。疑いもなくこの名称はよく知られている。しかし，もしわれわれがこれらの「喰い尽くされた人々」の人相をよく見るならば，その名称は必ずしも不当ではないであろう。彼らは，レールモントフが言ったように，「それぞれの喜びから最良の汁をしぼり取ることだけに努めている」がゆえに，すでに強い感覚の探求者である。彼らは，「無為のうちに老いた」がゆえに，強い感覚の探求者である。「活動舞台の初めに斗争なしに萎んだ」がゆえに。コーロソフ，決闘屋，ヴャゾブニーン[154]……についていえば，彼らに愛された人物が，すべて犠牲を捧げたのに，彼らの方は「悪意に対しても，愛に対しても」何ものをも犠牲にしなかったがゆえに。「他人の祭りの酒宴のように」生活が彼らを疲れさせていたがゆえに。彼らは偽瞞的である。彼らはあまりにも自己過信的である。なぜなら，彼らは，自分たちには「父親たちのまちがいと父親たちのおくれた知恵がいっぱいで」あり，また自分たちは「時期尚早に熟した」果実であり，そのために何の役にも立たないかのように自分たちを想像したからである。彼らは，仮面として大言壮語を用いて自分をごまかし，あらゆる活動をさけたがゆえに偽瞞的である。彼らにとっては，彼らの能力に応じた活動は存在しない。彼らのあと，それにつづいてトゥルゲーネフ氏の中篇でも，このきざな行為の側面が残った。しかし最後の中篇においてすでに，トゥルゲーネフ自身によって，その側面は皮肉をこめて描写されている。彼らにとって一つの共通の特徴は，彼らが強い感覚を求めることを愛するだけに，それだけにいかなる持続的な根気強い仕事もできないことである。幸いにも，彼らの生まれは，彼らのすべてに「遺産」を与え，そのため，彼らには社会にも近親にもかかずらう必要はない。彼らの願望はすべて抽象論に消え失せている。この点で彼らはきわめて単調である。……[155]

151）「三つの肖像画」の中の人物。
152）「余計者の日記」の中の人物。
153）Д., 14-15.
154）「二人の友」の中の人物。
155）Д., 15.

5.「余計者の日記」——余計者症状の自覚。

前述のように，トゥルゲーネフの作品においては，レールモントフがそのレールモントフ的“余計者”をただビジメョンコフ的人物との対照において描いたのに対して，もうひとり新しいタイプの“余計者”が登場してくる。それがまさに「余計者の日記」におけるトゥルゲーネフ的“余計者”の登場であった。

ここに，自分の物語を書いている余計者のひとりがいる。その余計者を天才や進んだ人間のように考えてはいけない。少なくとも，ルーヂンのように考えてはいけない。しかり，彼は知的にも道徳的にもそのような人物の域には達していなかった。ただ彼らの跡についてゆくような人であった。その余計者はビジメョンコフよりもまさっている。彼はH公しゃくよりもまさっている。しかし公しゃくは，力に溢れ，余計者の情熱の対象——リーザ——を破滅させた，あのレールモントフ的外貌によって，余計者よりもまさっている。余計者はビジメョンコフが仲直りしたように，捨てた女とあとで仲直りすることができない。この点彼においては個性が充分に発達している。だが彼はH公しゃくのように幸福ではありえない。なぜなら，社会全体およびその諸条件が公しゃくの味方をしており，公しゃくは社会の助けを借りて成功するからである。ここでは余計者は全く成功をかち得ることができず，自分を侮辱されたものと感じている。もしかりにH公しゃくの代りにこの余計者自身が成功していたとするならば，彼がコーロソフ，アレクセイ・ペトローヴィチ（「往復書簡」中の登場人物）のように，ついにはルーヂンと同じように振舞わなかったといえる保証はどこにあろうか。彼は「肝臓炎の病人」であるがゆえに，その限りで余計者であるのではないか。事実，たしかに彼自身自分について次のように述べている。「僕の生活は他の大多数の人たちの生活と少しも変ってはいない。両親の家，大学，小役人生活，退職，小範囲の知人，清貧，つつましい快楽，おとなしい仕事，適度の欲望——どうか聞かせてくれ給え，これらすべてを知らないものがいるだろうか。……」[156]

われわれはこの告白を完全に信じているわけではない。もし告白が本当ならば，彼は次のように直接，きっぱりと言うことはできなかったはずであろう。すなわち，「人々には善人，悪人，賢者，愚者，快適な人，不快な人，がいるが，余計者……それだけはいない。つまり，僕の言うことを分かってもらいたいのだが，たとえそれらの人々がいなくても宇宙はやっていけるだろう……勿論だ，しかし有用でないということ——これは彼らの主要な特質ではなく，彼らの顕著な特徴でもない。したがって，彼らについて語る場合，最初に諸君の口にのぼるのは，“余計者”ということばではない。それなのに僕は自分のことを形容するのに，全くほかのことばを見いだせない。余計者——ただそれだけだ。定員外の人間——それだけだ」。[157]“余計者”は彼自身，自分についてこのように考えているのである。……[158]

6.「二人の友」——死への逃避行。

「余計者の日記」におけるペチョーリン的“余計者”H公しゃくに対置される非ペチョーリン的“余計者”チェルカトゥーリンの登場は，同じく「強い感覚の探求者」と称しうるにしても，その偽瞞性ゆえに，他——相手の女性——に対して破壊的というよりも自己に対して破壊的，つまり自滅的である。あるいは，自滅を通じて他の凋落を招くのである。（後述8.参照）。

ここにヴャゾブニーンがいる。中篇「二人の友」の登場人物である。この人は自分を余計者と考えている。だが実際には，彼は善良で単純でおとなしい人間であり，全く教育をうけていない娘をも愛することのできる人間である。彼にはコーロソフの才覚はないが，全くコーロソフと同じように振舞っている。

156) Тургенев, Соч., V, 184-185.
157) Тургенев, Соч., V, 185-186.
158)〔われわれは彼についてこのようには考えない〕Д., 15-16.

ヴャゾブニーン[159]は少々伊達男であり，トゥルゲーネフ氏が現代の肯定的人間，アスターホフ[160]を呼んで名づけたところの gentleman というものの多くの性癖に苦しんでいる。状況が悪化して彼は田舎に追われたが，そこで何をなすべきかを知らず，１ケ月前に愛した妻の許から，おのれ自身目的をも行くえをも知らず逃げ出す。彼が生活において余計者とみなしているのは自分なのかあるいは妻なのか。「旅行だ！」彼は朝早く起きて，繰り返した。「旅行だ！」寝台にねころんで，彼はつぶやくのだった。彼にとってこのことばのなかには魅惑的な恍惚が秘められていたのだ。「ヴェーロチカ と別れた彼は自分の心が突然収縮し血塗れになった。彼は静かで善良な自分の妻があわれになった。彼の眼からは涙がほとばしり，彼女の額をぬらした……。」[161] だが事実，彼は善良な小人だった。彼の出発後，親族は，わけあって，彼の知恵，善良さ，教養，付き合いの質朴さについてたえまなく説明した！……そしていまや，ヴャゾブニーンが船から海へ身を投げたとき，彼の未亡人と結婚していたビジメョンコフは，自分の同類を見いだした。これがピョートル・ワシーリエヴィチである。ヴャゾブニーンにとっては海に身を投げること以外何もなすべきことがなかったのだ。[162]

7．「風」――賢い“無用者”。

――ヴェレチエフ[163]――これも余計者である。この人はマーシャを破滅させて，飲んだくれた。ヴェレチエフは有能なロシア的性格の持主であり，多くのことに適しているのに，何の役にもたたない。これらの人々はロシアの中篇では古くから飲んだくれている。公衆はすでに彼らを見慣れており，それゆえに作家は中篇の末尾で述べている。「ある範囲の知人たちはヴェレチエフを，宇宙を感嘆させるために生まれついた非凡な人間と見なしつづけた。だが彼は，自分自身己れの完全な根本的な無用性を非常によく自覚していたがゆえに，彼らより賢かった。……」[164]

8．「往復書簡」――男性の自滅と女性の凋落との双対性。

「往復書簡」のなかでわれわれはまたしてもトゥルゲーネフ氏の好みの人物に出会う。またもや余計者である。これはアレクセイ・ペトローヴィチと呼ばれる。ペトローヴィチが作家によってどれほど前進させられたかは，はやすぐに分かるであろう。見給え。この好みの人物はいかなる側面から現われているか。この紳士が余計者になった原因となっているものは，ただ生活の月並みさでもなければ，ただの社会でも，ただの人間でもない――しかり，かの心地よい理想そのものが弱い側面から現われ始めている。すでに作家はそれを非難している。

「僕は天涯の孤独だ（とアレクセイ・ペトローヴィチは言う）。若いとき僕は孤独な生活を送った。とはいえ決してバイロンの振りはしなかったっけ。だが第１に環境，第２に空想する能力と空想への愛，かなり冷たい血，誇り，怠惰――一言でいえば，多くのさまざまな原因が僕を人間の社会から遠ざけたのだ。空想的生活から現実的生活への移行が僕のなかではおそく行なわれた。おそらくは，あまりにもおそく，おそらくは，これまでにもなお不充分に。僕の持ちまえの考えや感情が僕自身を慰めてい

159）チェルヌィシェフスキーは，ヴャゾブニーンを「善良な教養ある人間であるが，全く空想的でなく，日常の状況そのもののなかでの静かな幸福な安らぎを好む人間」として特徴づけている。 См. Ч., IV, 699.

160）「風」の中の人物――チェルヌィシェフスキーによれば，アスターホフは「固陋な俗人で，自分の低さと無感動をヨーロッパ的フレーズと礼儀正しい物腰とでごまかす人間」である。 См. Ч., IV, 699.

161）Тургенев, Соч., VI, 72.

162）Д., 16-17.

163）「風」の中の人物。

164）〔そして彼の仲間以外にも，もし彼が自分を破滅させなかったなら，彼からはきっと何かが出てきたはずだ，もっともそれが何であるかは悪魔のみぞ知るではあるが，と考えるよう人々がいた……これらの人々はまちがっていた。ヴェレチエフからは決して何も出てきはしない！〕 Тургенев, Соч., VI, 157; Д., 17.

た間は，理由なき物言わぬ歓喜に身を委ねることができたりした間は，僕は自分の孤独を訴えたりはしなかった。僕には товарищи はいなかった。いわゆる друзья はいたんだが。時に僕は，電気の器械が放電子を必要とするように，彼らの存在が必要だった――ただそれだけだ……だがいまでは，白状するが，いまでは僕は孤独に苦しんでいる。ところが僕は自分の状態から何の出口も見いだせない。僕は運命をとがめはしない。僕だけが悪いんだ，当然罰せられるべきなんだ。若いとき，一つのことが僕の心を占めていた。僕のいとしい自我である。僕はおめでたい自惚れをはにかみとみなしていた。僕は社会を避けていた。――そしていま，僕自身，自分におそろしくあきあきしている。どこに身を隠すべきか。僕は誰をも愛さない。他の人々との近づきはすべてどうしてか固苦しく偽りだ。僕には思い出さえない。なぜかって，僕の過去の生活のなかに自分自身以外，何も見いださないから。僕を救ってくれ」……165)

8–1.

そこに見られるのはすでに自分自身に対する大方の嘲笑である。そこでは“余計者”は社会をではなくて自分自身を，自分のいとしい自我を責めている。その自我は，以前には他の人々によって，大いに慰められていたものだった。……166)

見給え，アレクセイ・ペトローヴィチが自分および自分と同様の若い人々を何で非難しているかを。「いかなる一定の傾向をも外部から受けず，実際に何も尊敬せず，何も堅く信ぜず，われわれは自分から欲することをなすことができる……そしてここに，世間に，再び一人の片輪者がふえる。つまらぬ人間の一人がふえる。それらの人間においては，エゴイズムの習慣が真理への志向そのものを歪めており，おかしな純朴がみじめな狡猾さとともに住んでいる……自然的活動の満足も，心からの苦しみも，確信の心からの歓喜も，永久に知らないところの，無力にされた，不安な思想をもった人間が一人ふえる……すべての年令の欠陥を自分のうちに蔵しながら，しかもわれわれはその各々の欠陥から，それの償いになるよい側面を失っている……われわれは子供のように愚かなのに，子供のようには誠意さをもっていない。われわれは老人のように冷たいのに，われわれのなかには老人らしい分別はない。」……167)

同じ書簡のなかで，作家は，このアレクセイ・ペトローヴィチと一人の美しい婦人が，すでに運命の境界線にいた最初の青春時代に，なぜ幸福でなかったのかと語りながら，あえて次のような原因を引き出している。「偽瞞がわれわれと手に手をとりあってまかり通ったからであり，それがわれわれの最良の感情を毒したからであり，われわれのなかのすべてが人為的で不自然であり，われわれが全く互いに愛しておらず，ただ愛そうと努めただけであり，愛していると想像していただけであるからである。」……168) いたましいが正当な承認である。……169)

いまや他の側，婦人の方を見給え。……170) そこにわれわれはすでに，『ルーヂン』や「ファウスト」においてと全く同様に，別の確信への移行を見る。ここで二つの側に等しく耳が傾けられ，正当性が両

165) Тургенев, Соч., VI, 164-165.; Д., 17.

166) 〔しかし，同時にアレクセイ・ペトローヴィッチのこのことばのなかにはいかにレールモントフの「思い」の繰り返しがあることか！ 作家にとっては，この詩人によって描かれた，わが世代の絵から離れることがいかに困難であることか！〕

167) Тургенев, Соч., VI, 168-169; Д., 17-18.

168) Тургенев, Соч., VI, 170; Д., 18.

169) 〔そこではもはや生活の月並みさについては語られていない。しかし諸君は，余計者に損害を与えて幸福になるような月並みのビジミョンコフやピョートル・ワシーリエヴィッチはここにはいないと考えるだろうか。……それとは反対に，もろもろの中篇の思想が同じものとしてとどまる間は，作家にとって，このような人物は常に必要であろう。このようにして，「往復書簡」には友人がおり，その友人は非常に愚かな人間で，病気のアレクセイ・ペトローヴィッチを羨ましがらせるほど，イタリアの生活を楽しんでいる！ だがここではわれわれにはイタリアなどに用はない。〕

170) 〔ついに彼女は，まさにその「往復書簡」のなかで，トゥルゲーネフ氏の最もよい，最も完全な作品のなかで，大いなる真実さから，口を滑らせている。〕

方の側に与えられる。……[171] その婦人はトゥルゲーネフ氏の中篇では，そのときまではきわめて弱くしか是認されていなかった。次のようなことを彼女はアレクセイ・ペトローヴィチに答えている。（「往復書簡」より）

「私たち女性は，少なくとも私たちのうち家庭生活の日常的な世話に満足しない女性は，自分の最終的教育をやはりあなた方男性から受けています。あなた方は私たちに対して強い大きな影響力をおもちです。いまあなた方が私たちと何をなさっているか，見てごらんなさい……若い娘を想像してごらんなさい。ほら，彼女の養育は終っています。彼女は生活し楽しみ始めています。しかし彼女には楽しみだけが少ない。彼女は人生に多くのことを要求しており，彼女は愛について読み，空想しています。彼女は彼女の魂が愛慕するような人がいつやって来るかを，見まわし，待っています……ついにその人が現れる。彼女は夢中になる。彼女はやわらかい蠟のように彼の腕のなかにいる。すべてが，幸福も，愛も，思想も——すべてが彼とともに一度に急に現われた。彼女のすべての不安は鎮まっている。すべての疑いは彼によって解決され，彼の唇から真理そのものが語りかけているように思われる。彼女は彼に敬虔の念を抱いており，自分自身の幸福を恥ずかしく思い，学び，愛する。このとき，彼女に対して彼の権威は大きい！……もしも彼が英雄であったなら，彼は彼女を燃え上がらせ，彼女を自分の犠牲になるように教えたであろう。そして彼女にとってはすべての犠牲はたやすいものであったであろう！　しかし現代には英雄はいない……やはり彼は彼女を自分の好きな方向へ向けている。彼女は彼の興味を惹いているところのものに身を任せている。彼のことばの一語一語が彼女に感銘を与えている。彼女はことばがいかにつまらなく，空っぽで，偽りであるかもしれないことをそのときにはまだ知らない。そのことばはそれを述べる人にとっていかに値打ちのないものか，またいかに信じられないものかを知らない！　至福と期待とのこれらの最初の瞬間のあとに，普通別離がつづく……最もこまかい打算，最もみじめな配慮が，最も情慾的な感激にみちた若い心のなかに生きうるということ……これを私は残念ながら体験で知りました……やはり別離か。そこであなたがたはこうおっしゃることでしょう。明らかに自分たちは一緒に行く運命にはなかったのだ，と。……この点に，男と女との間の違いがあるのです。男にとっては，新しい生活を始め，すべての過去をうせろと自分から払いのけることは，何でもないことなのです。女にはこれはできません。……ここにあわれな，おかしな光景が始まるのです。……自分に対する期待と信仰も次第に失って女は色あせ，ひとりしおれる。自分の追憶をかたくなにしまいこんで，まわりの生活が自分に提起するすべてのものから顔をそむけながら。ところで男の方はどうなのでしょう。彼を探せ！　彼はいずこぞ！」[172]

では実際に彼を探してみよ。彼はどこにいるのか。アレクセイ・ペトローヴィチは外国へ行ってしまった。しかしここではその代わりに，彼は作家からどのように哀れな罰をうけたことか。そこ，外国では，或る踊子を愛した彼は自分の最後の日々をずるずる長びかせている。……これはすでに新しい思想の初まりである。これは作家によって考え出された罰であり，棄てられた婦人によって述べられたあらゆることばよりも強いものである。[173]

9．最後の三つの短篇。

トゥルゲーネフ氏の最後の三つの短篇は，ただ異なった側面からその同じ思想を補足しているだけである。それらのなかで作家は意見を更に明らかに述べたが，これらの作品に対して新しい思想は，肯定

171）［更にどうなるのか。次の中篇は何を述べるのだろうか。前の繰り返しだけでは大して意味がない。それゆえ読者がいま気がつくだろうように，新しい思想の命題は何か新しい結末を必要とする。ここでは，遊びが情慾で終る。生活は強い感覚の探究であるという理解，これも同様である。いまやトゥルゲーネフ氏はまだわれわれを一体どこに導くのか。われわれは知らない。これまで，われわれは彼の中篇のなかにまだ生活の完全な理解を見ることはなかった。「往復書簡」以後，その同じ思想を，彼は他の諸側面から発展させた。このようにして，ついには婦人がわれわれに語っているところのものへわれわれは戻る。］

172）Тургенев, Соч., VI, 171–173.；Д., 19.

173）Д., 19.

的な形では少しも作用しなかった。[174]

9₋₁.「ヤコフ・パースィンコフ」――美しい肯定的人間ロマンチスト。

ヤコフ・パースィンコフは，その他の人物とはっきり分かれているように見えるかもしれないが，何ら新しいものを含んでいるわけではない。パースィンコフは，作家にとって，イデーとしてのみ，同じ人間の他の一側面としてのみ，必要であった。この側面はわが祖国ではきわめて稀有のものであり，作家が追っているイデーに関してのみ意味をもっている――パースィンコフはロマンチストである。たしかにロマンチストたちは，すべての美しいものを，すなわち愛を，自分のイデーを，科学を，婦人を，社会を信じ，それにおいて愛，イデー，信仰の充足が言い表わされるところのすべてを信じ愛した点で特異なものであった。彼は余計者に対してどのような関係をもつことになるのか。余計者は愛を信じていない。少なくとも愛は余計者の能力をすべて汲み尽くすことができない。余計者はついにはイデーに対しても信仰を見失う。余計者はおそらくあまりにも善へと急ぎ，よいものには何も気がつかずにその脇を走り過ぎる。余計者は，すべてのものから最良の汁をいち早くしぼり取るが，その汁で自分の力を強めはせず，逆に力の弱いものになる。彼らは人間のなかに善よりもより多く悪を見ている。……なぜ作家は突然ロマンチストに襲いかかったのか。ロマンチストはどれほど余計者のためになることができたか。ロマンチストから余計者は何を借用することができたか。それは，ロマンチストの大部分が身を打ち込んだところの，大部分よそおわれた肯定的信念なのか。確かに，ロマンチストのうちのただ少数の人たちだけが，自分の特殊なオルガニゼーションに従って，絶えず同一の確信状態にあることができた。ロシアの生活においては，ロマンチシズムは偶然性であり，文学的エピソードであり，人民の生活に対してその健康な部分としては決して関係をもたなかった。そうしたロシアの生活において，ロマンチシズムへのこの訴えは何のためか。このような課題を解決することは，以上のような外的な形ではできない。パースィンコフは例外的な本性の人物である。だが，だれでも青春の最初の時期，イデーと感情のめざめの時期にはパースィンコフ的である。これは，われわれが青春において，それに近づき，しかし持ちつづけることができないところの，われわれの本性の永遠の変形の一つである。ではパースィンコフは何のために。

しかり，パースィンコフは愛を信じ，永遠に愛を信じていた……したがって，パースィンコフはだれかの模範になりうるだろうか。

しかし，神様！　パースィンコフを愛したのは，ヴァルヴァーラ・ニコラーエヴナとマーシャである。作家は彼にこの褒美を用意した！　パースィンコフは何のために描きだされたのか。作家は，ある人物で，休むことが必要であった。その人物は，束の間の情慾をもつだけでなく，何によっても動かされない不変の信仰と感情をもち，他人のために自分を犠牲にすることができる。作家は，肯定的に美しい人物を描こうと欲し，先ずロマンチスト，パースィンコフを詳述した。[175]

9₋₂.『ルーヂン』――心の冷淡な頭の熱狂者ルーヂン。

『ルーヂン』には何か同じような人物――ロマンチストではないが，冷淡でもない肯定的人物レジネフがいる。レジネフは比較にならぬほどパースィンコフよりもまさっている。[176] なぜなら彼は事実ロシア人であり，ヴィンテルケラー（パースィンコフが育ったパンシオンの所有者）の被養育者ではないから。しかしそれにしてもこれらの人物は肯定的に美しい人物には程遠い。「理想なしに生きるものは哀

174）Д., 20.
175）Д., 20.
176）バニェツキーによれば，「ドゥドゥィシキンは，アンネンコフと同様に，彼と同時代の文学の肯定的理想を，政府の良き事業を積極的に助ける活動的官吏の形象のなかに見ていた。青春の自由思想的気分と袂を分った，近視眼的な，自己満足した地主，レジネフは，ドゥドゥィシキンにとっては，『比較にならぬほどパースィンコフよりもまさっている』」のである。Бонецкий, Указ. Статья, стр. 30.

れだ（とパースィンコフは言う）。わたしには理想があった。わたしはそれを見つけた。そしてそのときからだれをも愛さなかった」。[177]

このロマンチストと余計者との間には全き深淵がある。われわれはいまやこの深淵をいかなる跳躍によっても跳び越えることはできない。

ルーヂンはパースィンコフと全くちがう。

ルーヂンには熱狂がある。彼にはまた冷淡さもある。しかしその冷淡さは血のなかにあって，頭のなかにあるのではない。したがって彼は頭での熱狂家である。彼は役者ではないが，同時に役者でもある。彼はこすい奴ではなく（ルーヂンの友レジネフは彼のことをこのように述べている），しかも他人の金で生活しているのに，子供のように無邪気である。彼は赤貧・貧困のなかで死ぬことになる。彼は自分では何一つしないであろう。なぜなら仕事をするのは彼の使命ではないから。なぜなら彼のなかには性格がなく，血がないから。ルーヂンの不幸は彼がロシアを知らないことにある。

「これはたしかに大きな不幸です（と作家はレジネフの口を借りて言っている）。ロシヤはわれわれなど誰もいなくても，存在してゆけますが，われわれの方は，だれひとりとして，ロシヤなしには立ちゆかないのです。ロシヤなどどうでもいいと思っている人は二重に不幸な人です！　コスモポリチズムというのは，ばかげた思想で，コスモポリートなどという人間は，ゼロです。ゼロ以下ですよ。民族性をぬきにしては，芸術も，真理も，生活も，なんにもないことになります。容貌の特徴がなくては，理想的な顔にもなりません。特徴がなくてすむのは卑俗な顔だけです。しかし重ねて言いますが，これはルーヂンの罪ではありません。これが彼の運命なんです。にがい，悲しい運命です。このような運命のゆえに彼を責めるということはできません。なぜわが国にルーヂンのような人間が出現するようになったのか，という問題を考えることになると，これは話があまり遠いところへいってしまう」。[178]

生活のすべてを，農学も，教育も，すでに経験し，劇団主でも，書記でもあったルーヂン自身は，はや体力に見すてられかけ，貧困だけにとりつかれたルーヂンは，他の個所で友人レジネフに言っている。

「それはともかく，ぼくはほんとうになんの役にも立たない人間なんだろうか。この地上にぼくのための仕事はないのだろうか。ぼくは何度も自分にこの質問を出してみたのだが，いくら自分をひくく見ようとしても，そうざらにはないような力が自分にあることを感じないわけにはゆかなかったのだ！なぜこの力が実を結ばないのだろう。そうそう，それから，きみもおぼえているだろうが，ぼくらが外国にいたころ，あのころのぼくは思い上がって，自分をいつわっていたよ……たしかにあのころのぼくは自分の求めているものをはっきり意識しないで，ことばに酔い，まぼろしを信じていたのだ。だがいまは，誓って言うが，ぼくは自分が望むことのすべてを，だれのまえでもはっきりと言うことができる。ぼくにはなに一つかくす必要はないんだ。ぼくはまったく，文字どおり，善意の人間なんだ。だから，おとなしくしているし，環境に順応したいと思っている。多くを望んではいないし，卑近な目的を目ざし，たとえわずかなことにでも役だちたいと願っている。ところがそれがうまくゆかない！」[179]

先に引用したように，レジネフは，他の個所でルーヂンにとって何事もうまくゆかない理由を説明した。

中篇の終わりにおけるルーヂンは以上のようである。だが彼は初めにはこのようではない。終わりにおいては，この人間のすべての和解的側面がすでに作家によって議論の形で述べられている。

トゥルゲーネフ氏の他のすべての人物と同じように，ルーヂンも行動している。ルーヂンはナタリアの心を迷わせたが，自分でもおそらく彼女を愛しているか否かをわが身に言うことができなかった。すなわち，この婦人も彼の存在を全くとりこにしてしまうことができなかった（例えばパースィンコフの理想がパースィンコフをとらえていたように）。彼は，彼女と別れたとき自分が悩むかどうかを言うことができなかった。これについて作家はみずからに問うている。

---

177) Тургенев, Соч., VI, 222.
178) Тургенев, Соч., VI, 349.『ツルゲーネフ』（世界文学大系 31）金子幸彦訳，p. 77 参照。
179) Тургенев, Соч., VI, 364. 金子訳，前掲書 p. 86 参照。

「ロヴレース[180]を気どっていたわけでもないのに――この点は彼の正しさを認めなければいけない――彼はなぜ哀れな少女を迷わせたのであろうか。」

この問いに対してこう答えている。

「冷淡な人間ほどほれやすい者はない」。[181]

9–2–1. ドゥドゥィシキンの「ルーヂン」評。

これは，作家が追跡しているイデーに関しては答えになっていない。それにしてもわれわれは，問う。この熱狂家は，すべての美しいもののこの熱烈な擁護者は，いかにしてかくも非情になりえたのか。なぜ彼の心ではなくて，彼の頭が熱情的なのか。なぜこれらの人々には心がないのか。――これこそ主要問題である。われわれが，この問題をだすのは，心理学にたずさわっている人々に向かってではなく，わが社会的人間およびこのような人間をかたちづくっている諸条件を研究している人々に向かってである。この問題は，一見して思われるほど表面的なものではない。それはトゥルゲーネフ氏が描いているところの世代の信念と緊密に結びついている。これらの頭の熱狂者たちは，おそらく事実熱狂者ではあるまい。ただの頭だけでは熱狂者にはなりえない。すなわち，この点においても，他の点においてわれわれが指摘しているのと同じような，根拠の薄弱さがあることが分かる。われわれはなぜそれらの人間に心がないのか，という問いを，トゥルゲーネフ氏の描く各主人公に課そうと思っていた。しかしいままでわれわれは語らないでいた。なぜなら作家自身，その最後の作品において，われわれを導いて終局により近づけるいま一つの思想を述べたからである。

ルーヂンが知能に夢中になったと同じように心に夢中になった，と仮定しよう。そのとき諸君は，のちに彼が，船から海に身を投げたヴャゾブニーンとはちがった風に振舞うであろうと果たして考えるだろうか。

トゥルゲーネフ氏の中篇で描かれた婦人がすべて，トゥルゲーネフ氏の主人公（パースィンコフを除く）の各々に，ナターシャがルーヂンに言ったのと同じことを言うことのできるのは，何によってか。「あなたはすることが何もないので，退屈まぎれに，わたしをからかったんですわ」と言うことのできるのは何によってか。これらすべての人物には生活の把握がなく，情熱，熱中，生活の一断片の把握だけしかないところに問題がある。他の諸力――コスモポリティズムと民族性，教育と活動，理想への志向と肯定的生活への志向――の間の均衡がないように，生活の把握がない。すべて彼らは生活しながらも，一面的に生活を把握している。[182]

9–3. 「ファウスト」――鎖につながれた自我。

トゥルゲーネフ氏によって述べられた，この主題についての最後のことばに直接移るために，「ファウスト」からいくらかのことばを引用しよう。いまや「ファウスト」の内容をわれわれは物語ろう。以下がわれわれにとって重要な，「ファウスト」の結びのことばである。

「この数年来の経験から，僕は一つの確信をつかんだのだ――生活は冗談でもなければ慰みでもない。またそれは享楽でさえもない……生活は苦しい労働なのだ。欲望の拒否，不断の拒否，これこそ人生の秘められた意味であり，人生の謎を解くべき鍵である。たとえいかに崇高なものであろうとも己れの好む想念や空想の実行ではなく，ただ義務の履行――これこそ人間が心にかけなければならぬことである。自分の体に鎖をかけなかったら，義務という鉄鎖をまとわなかったら，人間は生涯の行程を最後まで倒れることなしに行き着くことはできない。誰でも若いときには，人間は自由なほどありがたい，

180）ロヴレースは女たらしの意。英リチャードソンの小説 *Clarissa Harlowe* の主人公の名。

181）Д., 20–22.「ルーヂン」からの引用は金子幸彦訳参照。

182）Д., 22. バニェツキーはこの点について次のように述べている。すなわち，「ドゥドゥィシキンによる，ルーヂンの形象の批評は，完全に支配階級の利害に応える批評であった。ルーヂンおよび彼と同じような人々の不幸は，彼らが『現実生活に対する』健康な『志向』を失っていることにある，とドゥドゥィシキンは断言した」。Бонецкий, Указ. статья, стр. 30.

自由であればあるほど，それだけ発展することができる，とこんな風に考えがちなものである。若いときには，そういう考え方も許されるが，峻厳な真実の顔が，ついに自分をまともに見つめるようになったとき，偽りの観念で自ら慰めるのは恥ずべきことだ」。[183]

一人の美しい婦人エリツォーヴァの平安を乱した П. Б. はこう言い，彼女の知的視界を開いたことによって彼女に情熱を起こさせた。彼女にはそこからの出口はなかった。一つの死が必然的であった。それゆえエリツォーヴァは死んだ。彼女は自分の義務を果たしたのである。トゥルゲーネフ氏は「ファウスト」のなかで，このように述べており，そしてこの結びのことばはわれわれを偶然にも最初の中篇「コーロソフ」へ引き戻した。そこではこの若い（非凡な）人間は，義務の感情については少しも思い出すことなしに，同様の振舞いを全く無遠慮に説明している。[184]

10. ドゥドゥィシキンの総括的批評――和解の発見。

義務！ 義務の感情！ 生活は苦しい労働であり，快楽の鎖ではない。義務の感情を決して忘れないものは堕落しない！ これこそ，トゥルゲーネフ氏の小説の主要な登場人物をつぎつぎに検討することによって，われわれの到達した真理である。われわれは，最初のものとは完全に対立した概念に到達した。われわれは同じ主題のまわりを絶えずめぐったが，われわれの見たところではこの主題はとどまることなく変化した。われわれは人間の行為における情慾とその法則性の神聖視によって始めた。そして唯一の指導的原理として義務の神聖視によって終えた。情慾はコーロソフを実際よりも若く見せた。情慾はエリツォーヴァを殺した。われわれは，日々の生活が月並みさとしてあらわれているところの「パラーシャ」から，そして余計者――彼には自分の占めるべき場所がなく，それゆえ員数外のロシア人と見なされている――から始め，ルーヂンを非難するレジネフで終えた。レジネフはルーヂンがロシアを知らず，ロシアの生活を生活していないことを責め，民族性なしには「芸術も，生活も，真理もない」という。われわれは，どこかに逃げ，なぜかを問い，何かを探しているアンドレイおよび彼の追随者たちから始め，「コスモポリティズムというのは馬鹿げた思想で，コスモポリートなどという人間は，ゼロです。ゼロ以下ですよ」というルーヂンで終えた。われわれが到達したのはこれである！[185]

10₋₁. カラムジーンの教訓。

この前進の一歩は偉大である。そしてここでわれわれは А. И. トゥルゲーネフ（カラムジーンの同時代人であり友人）にあてたカラムジーンの次の文章[186]を思い出そう。――或る人々は，これを読むのが初めてかもしれない。カラムジーンは書いている。

「私の父のうちには多くの住居がある。あなたにとって有益な活動はそこではなく他のところに見いだされる。他人がわれわれに有益な活動を要求しなければしないだけそれだけ，われわれは道徳的存在としてその活動を自分により多く要求しなければならない。われわれ，魂をもったロシア人にとっては，ロシアだけが独自のものであり，ロシアだけが真に存在する。他のすべてはただロシアに対する関係にすぎず，考え，幻にすぎない。われわれはドイツ，フランス，イタリアにおいて考え，夢みることはできる，しかしロシアでは行為をなすことができる。そうでなければ，市民もおらず，人間もおらず，いるのはただ胴体をもった二本脚の動物である」。

わが史料編さん者の手紙からのこの断片は，表向きわれわれがここで述べている問題全体を包含していないと思われるかもしれない。しかし，一見して明らかに，次の一つのことは疑う余地がない。すなわち，いまわれわれによって解決されている問題は，もしも手紙が書かれた年を考慮に入れるならば，少なくとも 30 年前に解決されていたということである。更に，もしもカラムジーンがすでに 20 年間の

183) Тургенев, Соч., VII, 50. ツルゲーネフ『片恋・ファウスト』米川正夫訳，新潮文庫，p. 170 参照。
184) Д., 23. 本稿 p. 202 参照。
185) Д., 23.
186) «Москвит.» 1833 г. No. 23 и No. 24, стр. 183–184. 1825年 9 月 6 日付の手紙からの断片（原注）.

仕事の結果，『ロシア国史』にたずさわることのうちで，この原則を実行に移していたという事情を考慮に入れるならば，この問題は更にいっそう古いものになるであろう。この問題は，わが世紀の初めのものであり，その解決は，19世紀の当初のものである。この真理は，ロシア文学史を知るものには周知のことである。……[187]

行為をなすことができるのはロシアだけであり，他方，考えたり夢みたりするのは――どこでも好きなところでできる，というカラムジーンの思想にたち戻ろう。この思想は，表向き，われわれが述べ，かつその解決をトゥルゲーネフ氏のもとに求めたところの問題全体を包含していないように思われるかもしれない，とさきに述べた。しかし，われわれは結論から結論へ移るにしたがって，この思想があまりにも多くのものを包含していることが分かるであろう。[188]

10–1–1. 和解の手段。

行為に取りかかるものは，何よりも先ず，本論の初めに述べたところの，抽象的思想と現実生活との不一致を廃絶しなければならない。したがって，彼は，和解の手段，少なくとも，一方から他方への移行のための手段を探さなければならない。事実，思想家を任ずる者は，自分をとり囲むすべてのうちに，「月並みさ」だけを見てはならない。彼が何を見るべきか，われわれは知らないが，己が誠実に奉仕しているところのものを軽蔑をもって見ることだけはあってはならない。これが第1。[189]

10–1–2. ロシア生活の独自性。

われわれ，ロシア人にとって，ロシアのみが独自であるというカラムジーンの思想，あるいは，トゥルゲーネフ氏のことばを借りるならば，民族性なしには芸術も，科学も生活も存在しないという彼の思想は，それ自身，そこからきている。

これは第1の前提から直接に出てくる。1856年にトゥルゲーネフ氏は，「コスモポリティズムというのは馬鹿げた思想で，コスモポリートなどという人間はゼロです，ゼロ以下ですよ」と言っている。カラムジーンは1825年に「ロシア人にとってロシアなしには市民もおらず人間もおらず，いるのはただ胴体をもった二本脚の動物である」と言った。これらのことばの意味が全く同一であることを証明する必要はない。[190]

10–1–3. 生活のための義務。

これらの命題から他の諸命題のきびしい論理的必然性を引き出すことが必要であろうか。すなわち，例えば，生活は冗談でも，慰みでもなくて困難な労働であるという命題。われわれが遂行の使命を担っているのは，われわれの義務であって，いかに高尚なものであろうが気に入りの空想ではないという命題。事実，かつて最初のよい機会にどこかに去ったすべての人々を諸君が土地に結びつけるや否や，彼らにとって何らかのために他の時期，活動，労働の時期が始まるにちがいない。トゥルゲーネフ氏にあっては，これは，彼の主要な思想から論理的に出てくる。しかし，それはまたカラムジーンの仕事においても論理的に出てくるものであった。[191]

10–1–4. カラムジーンの歴史的閃光。

われわれはここで述べていることの確証として，同じカラムジーンのすべてを要約することもできた

---

187)［カラムジーンは，この手紙でまた他の思想をも述べたが，それはのちにゴーゴリのものだとされ，ゴーゴリ自身もそれを自分のものとしているように思われる。すなわち，文学に誠実に奉仕する作家は，国家の他のポストにあるあらゆる他の人と同じく，彼らもまた祖国に奉仕する。］

188) 同., 24.

189) 同., 24–25.

190) 同., 25.

191) 同., 25.

であろう。しかし，これはわれわれを何に導くであろうか。ここでわれわれの心を占めている問題は，われわれが今信じ始め，情報としてそれを印刷しているところの理論の誕生が昨日のことなのか，あるいは半世紀も前のことなのかという問題ではない。中心問題は，この理論の実践への応用である。なぜなら，同一の思想であっても仕事への応用では，いくつかが存在しうるのであり，これらの応用のなかにこそ事柄の本質のすべてがあるからである。問題，理論，解決は新しくないのに，しかも応用は常に新しくありうるのである。ところで事実，われわれは，すでにいくつかの応用を見た。

「何よりも先ず，私は人間であり，しかるのちにロシア人である」とはじめに言ったカラムジーンが，新しい理論に着手し，それを実地に適用し始めたとき，彼は『ロシア国史』を書き上げた。もしも彼が文芸の領域にとどまっていたならば，彼は新しい理論に基づいてもろもろの理想像を創造することに努めたであろう。しかるに彼は歴史を書き始めたのであり，われわれはいま，ヴラヂーミルら，イヴァンら……の特徴づけを与えられている。だがこれもまた，たしかに或る点から見ればそれぞれ理想像であると言いうるであろう。その後の歴史的研究は，そのことを争う余地なく証明した。新しい理論は，彼をしてヴラヂーミルの時代におけるロシア史の閃光を見ることを余儀なくさせた。……[192]

10₋₂. プーシキンの調和的世界。

われわれの考えをより明らかにするために，プーシキン——彼にも二つの活動の時期があった——にたち戻ろう。抽象的思想と肯定的活動との間の分裂，全人類的なものと民族的なものとの間の分裂，生活とイデーとの間の分裂，これらの分裂が意識されていた間は，彼は自分の作品の対象として現代の人物を選んでいた。そしてそれらの問題は，「ジプシー」においても，『オネーギン』においてもできる限りにおいて解決されていた。肯定的な活動の時期が彼に訪れるや否や，彼は，カラムジーンと同様，古代世界に閉じこもるようになった。ロシア生活のポエジーがあれほど豊富に散見されるところの，「ボリース」，「大尉の娘」，「ルサールカ」は，過去の時代の人々，最近の人種の「腐敗」にけがされていなかった人々，にかかわっている。この宿命的な衝突は明らかにプーシキンによって避けられ，解決されえなかった。「ルサールカ」と「大尉の娘」——これはたしかに自然の子らであり，彼らにあっては，魂のすべての力が全く調和している。スコットランドのバラードがバイロンと結び付いているように，プーシキンは19世紀に結び付いている。「ボリース・ゴドゥノーフ」全体も同様の色調で貫かれている。

したがって，プーシキンがその活動の後半の時期にその困難な問題を解決しようと思いついたとき，彼は全くそれを解決しなかった。彼は19世紀から17世紀に隠れた。芸術家のこの気転によって彼は誤った理想から救われた。[193]

10₋₃. ゴーゴリの転向——『往復書簡』

ゴーゴリが彼に続いた。この人は，カラムジーンと同じく，課題の解決に直接取りかかった。『死せる魂』への序文で始められた約束は，達成されないままに終った。公刊された彼の『往復書簡』からの断片は，彼が前進ではなくて，後退したことを示した。プーシキンは，それらの問題を避けたが，ゴーゴリはそれらを二世紀前の解決と同じように解決しようと欲した。イデーと生活との，かくも安易な和解は，それが古いものの繰り返しに他ならず，大衆に興味を起こさせえなかったがゆえに，安易なものであることは明らかである。それは或る理論家たちに気に入られた。ゴーゴリはこの思想の転換とともに創造する能力を失った。[194]

---

192) 〔(あいまいな言いがかりから免れるためにわれわれは，新しい理論の結果カラムジーンが導かれたところの，古代ロシアの一般概念，イデーについてのみわれわれが述べているということを，ここで断っておこう。ロシア史のために彼のなした他のすべての功績を，われわれはここで疑おうなどとは考えていない。それればかりかそれについては何も言っていない)。〕 Д., 25.

193) Д., 26.

194) Д., 26.

10₋₄. 残された課題。

われわれが以上で，他のことについて述べたのは，ただ，われわれのたずさわる問題に関して，そのような理論の変化がまだ何の意味ももたず，何も証明していないことを示すためである。言うべきことは少ない。わたしは生活と理想との間の分離を見ながらも，その生活のなかに理想を見いださんと欲している。どこにその理想を見つけるべきかを知る必要がある。とりわけ，自分自身のためにこの問題を解決する必要がある。わが文学史は，それがいかに小さな歴史であろうとも，その問題の合理的な解決以前に，その問題の生活への適用を決意したとき，最良の識者たちでさえもがいかにその問題のまわりをまわったり，それにつまづいたりしたかを充分に示している。そこには次のように述べる美学理論がある。すなわち，わが文学は一面的である。なぜなら，ただ否定的側面だけを記述し，肯定的側面を考慮に入れていない——この美学理論は，ここでは何の助けにもならないであろう。なぜなら，問題の外面だけに触れており，その問題の表面を滑っているからである。問題は，肯定的側面を規定することにある。そしてこの課題は美学の課題ではなくて，歴史および哲学の課題である。美学は自らの目的のために，歴史と哲学の帰結を利用する。だが美学はこれらの帰結を獲得することはできない。これらの帰結の最もよい証拠になっているのは，ゴーゴリの哲学から急いでつくられた断片（『往復書簡』），およびただの開びゃく期に国家の閃光を見たカラムジーンの歴史的信念である。

したがって，次の若い世代は，古い世代が脱け出たばかりのその車輪のなかで再び回転し始めた。プーシキンの面前にはカラムジーンの模範があったが，しかし，彼は若い時代にはそれを模倣しはしなかった。ゴーゴリの面前にはプーシキンの最後の活動期の模範があったが，彼はやはり自分自身の『検察官』と『死せる魂』を書いたのだった。どの世代も同じ問題を提起しているのであって，つまりその問題は解決されていないのである。どのようなデーターに基づいて，われわれはいまそれを解決ずみと見なすのであろうか。われわれがかなり後の世代であるということだけによるのであろうか。[195]

11. 結論。

トゥルゲーネフ氏に戻ろう。われわれは主要な問題に対する彼の解決がいかなる結果に導いたかを，すでに述べた。いまのわれわれは，その解決にはわれわれにとって目新しいものは何もないことを知っている。作家の課題はすべて未来のなかにある。そこに理論の適用を追ってゆかなければならない。この適用はいかなるものか——それはいまに分かってくる。そしてわれわれは，わが読者に言うであろう。すべての困難さは適用にある。適用にこそ課題のすべてがある。[196]

11₋₁. ネガティヴな側面（思想）

したがって，12年にわたるトゥルゲーネフ氏の活動の時期は，いま考察しているこの作家が，終始その問題を自分に明らかにしようとし，われわれの知った前述の解決に到ることのうちに過ぎた。

それゆえ，トゥルゲーネフ氏は新しいことをまだ何も述べなかったのか，と問う人々がいるかも知れない。われわれは，然り，彼は述べなかった，と答えるであろう。[197]

11₋₂. ポジティヴな側面（技法）

しかしそれはただ上の問題に関してだけである。トゥルゲーネフは，他の点では新しいこと，美しいことをたくさん述べた。それだけでなく，彼は同一の思想を絶えず仕上げ，同一の人物をさまざまな外貌で叙述し，そうすることによってついにはその個性をまざまざと明らかにした。われわれは以前には他の外貌のもとでその個性と知り合いであった。いまやその個性は多くのニュアンスにおいてわれわれの知るところとなっている。これはすべて，19世紀ロシア人の同じ病的個性である。繊細な観察的知力

195）Д., 26-27.
196）Д., 27.
197）Д., 27.

——残念ながら，創造の大胆さがしばしばこれを裏切っているのだが——の助けをかりて，彼はレールモントフの「思い」のすべてを，もろもろの人物によってわれわれに提示した。[198]

11₋₃. 判決（有罪）

しかし，たまたまここにもう一つの問題が現われる。すなわち，はたしてその個性は，それの仕上げに全力をつくすに値するほど重要であり，わが社会においてそれほどまでに重きをなしているであろうか。はたしてその個性は，その個性に結び付いているイデーが，ロシアの科学の領域で占めているのと同様の位置を，わが生活において占めるものであろうか。

その個性は，社会に生きている人間の諸タイプの多様性という点で重要であるというよりも，それの導いてゆく問題に関して，よりいっそう重要であるように思われる。もしかりに前者の点で重要であるとするならば，それらの人物の色調はよりいっそう多様であろう。というのは，それらの人物のどれをとってみても，それは自己と同類の他のものを思い起こさせ，それぱかりか，もしそう言ってよければ，そのいずれもがいわば気化するからである。カンヴァスに描かれた人物画についても，もし事実その人物画のなかに本性が乏しいならば，それらの「肉付けが貧しい」ことが示されている。われわれはトゥルゲーネフ氏の中篇の多くの主要人物についても同じことを言いうるであろう。それらのなかには肉付けが貧しいと。これは悪い徴候である。それは二つのうちのいずれか一つを証明している。人物を触感的なものにする力が作家には不足していたか，あるいは，これらの人々が実際にも特色に欠け，単調であるか，である。……[199] ここでは，以上に検討してきた人物を一掃するために，われわれは，彼らがまさにその個有の本質によって，すなわち，生活から逸脱して生きており，生活に接触せず，生活を知らないために，事実あまりにも単調かつ無特色であるのだと述べておこう。[200]

もはや，これらの章句に関しては多くの説明を必要としないであろう。以上のようにして，トゥルゲーネフの『中・短篇集』に対するドゥドゥィシキンの批評の結論は，つまるところ——前掲のコルバシンの要約にも示されていたように[201]——そこには生活の進んだ理解が少しも見いだされず，その生活は単調かつ無特色であって，半世紀も前にカラムジーンによって解決ずみだったものの単なる繰り返しが見いだされるだけだということである。

Ⅵ

われわれはさきに，[202] 以上整理・紹介してきたドゥドゥィシキンの批評に対するチェルヌィシェフスキーの反論についても言及することを予告しておいた。まえにも述べたように，[203]『中・短篇集』出版当時パリにあって本国の批評界の動静を気にしていたトゥルゲーネフのもとに届いた知らせは，あまり芳しいものではなかった。なかでも上述のドゥドゥィシキンの評論は，トゥルゲーネフ自身がその前年にチェルヌィシェフスキーの美学論文に対するその反駁を歓迎していた評者のものであっただけに，彼を大いに落胆させた

198) 且., 27.
199) 〔作家トゥルゲーネフの才能はどれほど多様な力をみずからのうちに含んでいるか——これについては彼の中篇の他の側面を考察する際に見るであろう。〕
200) 且., 27-28.
201) 本稿 pp. 171-172 参照。
202) 本稿 pp. 169, 172, 175 参照。
203) 本稿 p. 170 参照。

のだった。彼が作家としての，人間としての「破綻」を告白していることについては前に述べた。[204] この「破綻」は，ありきたりのソ連の文学史家にほぼ共通の図式に従っていえば，「19世紀後半のロシアの二大勢力の思想的非妥協性」が一作家トゥルゲーネフにおいて現象した無残な姿ともいえるであろう。事実，トゥルゲーネフの“余計者”の形象は左右両陣営からの反対が可能であったと考えられる。[205] しかし，前章までで明らかなように，ドゥドゥィシキンの評論は，たとえ「右から」の批判であるにしても，いわゆる純粋芸術理論家としてのそれではなく，むしろ現実への接近，実生活の価値をめざすものであった。[206] 他方，ドゥドゥィシキン評論に対して，いわば「左から」チェルヌィシェフスキーの行なった反論は，トゥルゲーネフの理想を，彼の“余計者”の形象を賛美し，現実や実生活に対してそれらのもつ価値を擁護するものであったのであろうか。このような批評は，当時，「右から」のもう一つの批判の仕方として行なわれていた。[207] それではチェルヌィシェフスキーの反論はいかなる視点からのものであったのであろうか。われわれはさきに，[208] ドゥドゥィシキンとチェルヌィシェフスキーとの間の中心的な対決点を両者の先行者であるベリンスキーの「現実」概念の分岐に求め，それが両者の「現実」把握における差異にあると推定した。これを少しでも明らかにするために，われわれは，再び当時の状況に立ち帰らなければならない。

悪評の知らせに落胆しみずからの破綻をもらしていたトゥルゲーネフにあてて，チェルヌィシェフスキーは1857年4月末から5月にかけての手紙のなかで次のように書いている。「……パナーエフその他にあてたあなたのすべての手紙にあらわされたような物悲しい調子で書くことをあなたに強いたのがどのような原因なのか，私は知りません。しかし，もしもこれが文学的な原因であるならば，あなたは間違っています。若干のなまくらたち（正直にいって，あなたはこれらの諸氏があなたになまくらと思われることを自覚しなければなりません）の意見があなたの作品についてのあなたの意見を本当に変えることができましょうか。あなたはあなたの善良さによってボトキンとその一派の人々の言うことすべてにあまりにも寛大に耳を傾けすぎます。ベリンスキーが彼らを厳格に扱っていた間は彼らはよかったのです――ベリンスキーが彼らの頭に自分の思想を詰込んでいた間は賢明でした。いまや彼らは活気を失い，『自分のおなかの欲から物を言うように』なり，なまくらになってしまいました。彼らは立派な人々ですが，芸術のことや何かそれに類したことは少しもわかっていない。ドゥドゥィシキンの論文を取ってごらんなさい。――彼がベリンスキーの言うことを繰り返している個所以外には，あなたはただ月並みさを見いだすだけでしょう。これらの人々の知力は，おそらく，非常に優雅で繊細ですが，それはあまりにもつまらない。あなたは彼らに対して好意的すぎますよ」。[209] 優雅で繊細に見えるが結局は欲からつまらぬことを言っている批評家たちに対する批判はともかくとして，こ

204）本稿 pp. 170–171 参照。
205）本稿脚注 23）参照。
206）本稿 pp. 182–183 参照。
207）拙論「『ランデ・ヴーにおけるロシア人』考」，『スラヴ研究』1972，No. 16，pp. 59–60 参照。
208）本稿 pp. 175，178–179（「ロシア文学のゴーゴリ時代概観」），183–184，197–198 参照。
209）Ч., XIV, 344–345.

こでチェルヌィシェフスキーがトゥルゲーネフの文学的正しさを積極的に認めているのはいかなる視点からであろうか。それは，まえにオストロフスキー，アヴヂェーエフの場合について例示したように，[210]「才能の力は真理のうちにある」という視点，つまり現実のもつ真理をリアルに描き出す能力に着目する視点からである。やや布衍すれば，ドゥドゥィシキンのいうまさにそのとおりに現実と調和していない，現実ばなれした“余計者”が，しかし現に存在するという現実のうちにおける真理を描き出しえている能力への着目である。

トゥルゲーネフは，同じくさまざまな角度からの反論にさらされたあの『父と子』について，後年に回顧して次のように言っている。これらのことばは，いまここで問題にしている『中・短篇集』に関してもほぼ同様のことを類推しうる根拠と見なされる。すなわち，「私は自分の作品では『イデーから出発している』とか『イデーを表現している』という評を，一度ならず耳にし，また評論で読んでもいるが，ある者は，そのために私を賞賛し，またある者は，逆に非難した。私にしてみれば，こういわざるをえない。すなわち，私はイデーではない生きた人物を出発点とし，やがて次第に適当な要素をそれに混ぜ，付加してゆく以外に，『人物像を創造しよう』などと企てたことは一度もなかった。」[211] そして「批評家というものは」，彼によれば，「総じて作家の胸中に起こったできごと，作家の喜びや悲しみ，志向，成功と不成功がどこにあるか，ということをあまりよく分かっていない。……作家というものはいつもただ『自分の理想の遂行』のみをことにしているものだと決め込んでいる。真理を，生活の現実を正しく強く再現することが……文学者にとって至高の幸福であるということを信じようとしない」。[212] 事実，前に見たように，彼の『中・短篇集』は，批評家ドゥドゥィシキンによっても，もっぱら「イデーから出発し」そのイデーにもとづく「理想の遂行」という観点からのみ見られ，そのうえで，その古臭くなったイデーが新しい現実と和解しえていないことが批判されたのだった。このようなドゥドゥィシキン評論に対するチェルヌィシェフスキーの反論は，前者と同じ次元においてそれに反対し，トゥルゲーネフの「イデー」を賞賛したものではなく，かえっていわば「生活の現実を正しく強く再現する」というリアリズムの視点を作家トゥルゲーネフと共有するものであった。

チェルヌィシェフスキーの反論そのものについては，その出版の事情，周囲の批評界の状況，ベリンスキーとの思想的つながり，ドゥドゥィシキンとの対決関係の経緯など，すでに多くのことを語ってある。それればかりでなく，ドゥドゥィシキン論文へのチェルヌィシェフスキーの直接の言及個所（引用，個別的な評語など）は前節までの脚注に入れておいた。[213] したがって，その反論の内容に関しては，もはや，多言を要さないであろう。

---

210) 本稿 pp. 179, 183–184 参照。

211) Тургенев, Соч., XIV, 97.

212) Тургенев, Соч., XIV, 99–100,

213) 本稿脚注 54), 62), 63), 159), 160) 等参照。チェルヌィシェフスキーのこの反論に関しては，——さきのドゥドゥィシキンの評論とは比較にならぬほど——多くの文献が見られる。例えば，К. И. Бонецкий, Указ. статья; Б. И. Бурсов, Указ. соч.; Е. Ефимова, Указ. статья; Л. Лаврецкий, Указ. соч.; М. П. Николаев, Указ. статья; История русской критики, т. II. しかし，その研究の根本方向がチェルヌィシェフスキーの衣鉢を継ぐものであるために，彼の見解に密着しすぎる傾向が目立っている。

チェルヌィシェフスキーによれば，『中・短篇集』を，現実再現の視点からではなしに，伝統的「イデー」の展開の視点から眺め，批評することは単なる理屈にすぎない。更に，そこから押し広げてトゥルゲーネフの“余計者”を作家の理想像として語ったり，それら“余計者”にオネーギン以来の“余計者”の「イデー」的類比や「イデー」的展開を見ることは，屁理屈というものである。

この屁理屈はいかにして現われたのか。ドゥドゥィシキン氏が推定しているのは，第1に，「アンドレイ・コーロソフ」から『ルーヂン』までのトゥルゲーネフ氏の全中篇における男性の主要人物を，トゥルゲーネフは理想として描いている，ということであり，第2に，すべてこれらの人物が同じタイプの引き写しである，ということである。一面的な理論が何という偏見に導くことか！[214]

前節で見たように，ドゥドゥィシキンの“余計者”形象の系譜づけには，たしかに単なる模倣的継承をこえた発展的継承のあとづけが見られ，それは特にトゥルゲーネフに帰せられた「破滅型若年寄り」の“余計者”タイプに明らかである。その意味でドゥドゥィシキンは，オネーギンからルーヂンに至るまでの“余計者”を――時に誤解されているように――単純に同一視しているわけではない。このことは，また，彼に対するチェルヌィシェフスキーの反論が――時に誤解されがちなように――単に“余計者”の類型区分にあったのではないことを示している。チェルヌィシェフスキー自身，実際に，ドゥドゥィシキンの推論の方法に即して，その点を明らかにしている。『オネーギン』（執筆 1823–1831，発表 1825–1832）につづいて，『現代の英雄』，『誰の罪か』など代表的な先行“余計者”小説は 1839 年から 1847 年にかけて『祖国雑記』『同時代人』に掲載され，[215] ベリンスキーのそれらに対する批評も同誌に発表されていた。それらを読みつなぐことのうちからドゥドゥィシキンの発想は生まれたというのである。

ドゥドゥィシキン氏は古い『祖国雑記』と最初の時期の『同時代人』とのなかで，エヴゲーニイ・オネーギンがわが社会および文学においてペチョーリンに代り，ペチョーリンがベリトフに代ったことを読み，最近彼は『同時代人』のなかで，これらのタイプにルーヂンが続いたことを読んだ――彼はこの対比を発展させようと思いついたが，この対比の表わすすべての意味を全く理解しなかった。[216]

対比そのものに誤りがあったというのではない。あえて対比することによって，かえって示される相違の根拠に目を開かなかったところに，表面的な繊細さを台無しにする内容のつまらなさがあるというのである。すなわち，

---

214) Ч., IV, 698. のちに見られるように，ドゥドゥィシキンの「一面的な理論」とは，彼の立論の基礎にある「状況調和」の理論である。

215)「ベーラ」，『祖国雑記』，1839，3月号；「運命論者」，『同誌』，1839，11月号；「タマーニ」，『同誌』，1840，2月号；「マクシム・マクシームィチ」，『同誌』，1840，4月号；「公しやく令嬢メリー」，『同誌』，1840．4月号；「誰の罪か」（前篇1章～4章），『同誌』，1845，12月号；（5章～7章），『同誌』，1846，4月号，（前・後篇全部），『同時代人』，1847，1月号別冊付録；ベリンスキー「エヴゲーニイ・オネーギン論」，『祖国雑記』1844，т. 37，No. 12；1845，т. 39，No. 3；ベリンスキー「現代の英雄論」，『同誌』1840年 т. 10, No. 6；ベリンスキー「1847年のロシア文学観」（「誰の罪か」について言及されている），『同時代人』，1848，т. 7，No. 1.

216) Ч., IV, 698.

しかし，彼らの間の対比ということがいえたのは，彼らの間の同一性――社会的発展の四つの異なる時代のこれら四人の人々の間の類似は全くないのだから――を示すためにでは全くなくて，彼らが属している時代の性格の間の相違を示すためにである。[217]

ほぼ上述のような視点と方法からチェルヌィシェフスキーは，トゥルゲーネフの主人公たちをオネーギンやペチョーリンの単なる「引き写しのヴァリアント」にすぎないとするドゥドゥィシキンの見解に対して，みずから積極的に転じ，オネーギン，ペチョーリン，ベリトフ，ルーヂンの間には「類似は全くない」とし，彼らの間の相違を「彼らが属している時代の性格」によって示そうとしたのである。彼によれば，それら四人の主人公たちの相違は，以下のとおりである。すなわち，オネーギンは「本質的に空虚な人間」であり，「自分が何を欲し，何をこがれているか」「みずからは知らない」がゆえに退屈している。ペチョーリンは，「全く別の性格の，別の発達の程度の人間」であり，「情熱を渇望し」「精力的な活動の能力をもっている。しかし彼はただ個人的に自分自身のことだけに心を煩わし」，「いかなる共通の問題も彼の心を占めない」のである。だがベリトフは全く異なっており，彼にとっては「個人的利益は第二義的重要性をもつ」ことはいうまでもない。しかし「彼は自分に全く活動の分野がないことで苦しんでいる」。更に，チェルヌィシェフスキーによれば，「これら三つのタイプは理想として描かれた。ルーヂンは理想として描かれたのでは全くない」。ルーヂンには，「働くことへの炎のような熱中」があるが，これは「少ししか役立たなかった」。なぜなら，彼には「実践的機知が欠けており，然るべき側面から仕事に取りかかる能力がなかった」からである。ルーヂンとベリトフとの間の差異は，「一人は思弁的な非行動的な性格であり，おそらくそれゆえに活動的な人々にとっては現われるべきときが来なかったからにちがいない。もう一人は労働する，たゆまず労働する――だがほとんど無益に」。ペチョーリンとルーヂンとの間の類似は更に少ない。「一人は自分の個人的快楽以外のことを何一つ考えないエゴイストであり，もう一人は自分のことを全く忘れ，共同の利害に全身没頭している熱狂家である。一人は自分の情熱のために生き，もう一人は自分の思想のために生きている」。このようにしてチェルヌィシェフスキーは，「これは異なる時代，異なる本性の人々である」と断言する。したがって，ドゥドゥィシキンの言うように，「ペチョーリンとオネーギン以後ルーヂンは何一つ新しいものを代表していないと，一体いかにして言うことができるだろうか」。できはしない。「彼においてはすべてが新しい。彼の思想から彼の行為にいたるまで，彼の性格から彼の習慣にいたるまで」。

最後に，チェルヌィシェフスキーは，互いに全く異なる人間を同じ一つのタイプに結びつけたドゥドゥィシキンの誤りを，彼の「理想とその状況との調和」の理論に由来するものとして説明する。すなわち，

「人間は状況と調和しなければならぬ」とはそもそも何を意味するのであろうか。つまりこういうことである。もしあなたにおばさんかおばあさんがいるとしたら，あなたは彼女があなたに満足するように振舞いなさい。もしあなたに上司がいるなら，彼があなたのことを「だれそれはすばらしい人間だ」

217) Ч., IV, 698.

と評判するように振舞いなさい。もしあなたに隣人がいるなら，彼らと仲よく暮らしなさい。もしあなたがまだ結婚していないなら，近所の噂であなたの花嫁だと公認されている最初の娘と結婚なさい。さもないとおばさんはあなたに満足しないでしょう。上司はあなたを昇進させないでしょう。隣人たちがあなたと結婚させようと思いついた娘は，花むこを引きとめることができなかったといって責められるでしょう，――みながあなたに満足しないでしょう。そして「あなたはあなたを取り巻く状況に合わない」，あなたは“余計者”だ，あなたは下らぬ，憐れむべき人間であるということが，2 2が4のように明らかになるでしょう。[218]

それではドゥドゥィシキンのいわゆる「労働する」とは一体何を意味したのか。チェルヌィシェフスキーはこのように問い，それは結局「敏腕な官吏，てきぱきと事を運ぶ地主たることを意味する」のではないかと答え，[219] 更にドゥドゥィシキンの議論の運びを揶揄して次のように述べている。

ドゥドゥィシキン氏は，「状況に調和する」という，この理論に熱中していたので，彼の手に入っただれの物語りであれ，彼はすぐに男性の主要人物を探し出して次のようにたずねる。「君は状況に調和しているか」――「君は労働しているか」と。バラトゥインスキーとプーシキン，レールモントフとトゥルゲーネフ氏の主人公たちは，みな一様にこれらの問いにまごつく。――そこで彼らはすべて同一のカテゴリーの人間であり，すべて同一のタイプの肖像であるとされてしまうのだ。[220]

ドゥドゥィシキンの「状況との調和」の尺度で計るならば，シェクスピア，ゲーテ，コルネイユ，バイロン，ソフォクレスの主人公たちはすべて「労働しない，状況に調和しない人間」のタイプに入ってしまう，とチェルヌィシェフスキーは皮肉たっぷりに言う。そして，このようなドゥドゥィシキンの誤りは，いまや明らかなように，彼の「状況との調和」体系によって導かれた概念の混乱によるものと説明されるのである。[221]

〔附記〕　本稿は昭和47年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

---

218) Ч., IV, 700.

219) バニェツキーは次のように述べている。「『祖国雑記』の批評家は，深く肯定的な形象として――『自分の仕事』を巧みに立派に行なうところの『敏腕な官吏』や『てきぱきと事を運ぶ地主』を――文学において承認するというきわめて散文的な目的を追求していたことを，チェルヌィシェフスキーは指摘している」。(Бонецкий, Указ. статья, стр. 30.)

220) Ч., IV, 700.

221) このようにチェルヌィシェフスキーが，ドゥドゥィシキンの所論をすっきり割り切っている裏には，ドゥドゥィシキンが本心で言いたかったことを世論を気にしてはっきり物を言わなかったという推測がある。すなわち，「トゥルゲーネフ氏の才能や作品についての『モスクワ人』や『モスクワ論集』の判断を，彼〔ドゥドゥィシキン――筆者挿入〕は復活させたかったが，しかし彼はこれをあえてしなかったことは明らかである……なぜはっきりと言おうとしないのか。あるいは，自分に反対する社会的意見を引き起こす危懼が，彼にこのことをなすことを妨げているのか。幸いなことに，わが国には社会的意見がある。それは弱い。――しかしやはりそれは，すでにわが文学に大きな利益をもたらしている。――いまやだれも社会的意見によって認められた才能に対して，あえて公然と反対しはしない。肝要なことは社会的意見である」。(Ч., IV, 701)

Первые повести И. С. Тургенева в критике С. С. Дудышкина

Кадзуко Идэ

В связи с выходом в 1856 г. трехтомного издания «Повести и рассказы И. С. Тургенева» появился ряд рецензий и статей. Автором первой обстоятельной статьи о издании Тургенева был С. С. Дудышкин. Вслед за ним с разбором «Повестей и рассказов» выступил А. В. Дружинин. Статьи Дудышкина иДружинина вызвали несколько откликов в печати. Как одна из них появилась полемическая статья Чернышевского, направленная главным образом против точки зрения Дудышкина на “лишних людей” в произведениях Тургенева.

Автор настоящей статьи особенно рассматривал статью Дудышкина, и тем самым выяснил различие во взглядах между Дудышкиным и Дружининым, которых обычно считают сторонниками “чистого искусства”. Не только недостаточно, но и несправедливо, что литературно-критическое наследство Дудышкина до сих пор серьезно не изучалось, как отмечает русско-советский литературовед, В. И. Кулешов. В результате разборы статей Дудышкина и Чернышевского, осветилось то, что главное состояло в том, как Дудышкин и Чернышевский понимали действительность, а не в том, как они понимали искусство.

Автор предлагает японским читателям ближе познакомиться с малоизвестным в Японии Дудышкиным.